Hope

Fun

Support

Encounter

聖学院大学ボランティア活動支援センター
2020 年度事業報告書

Seigakuin Volunteer Support Center Report 2020

Love

Change

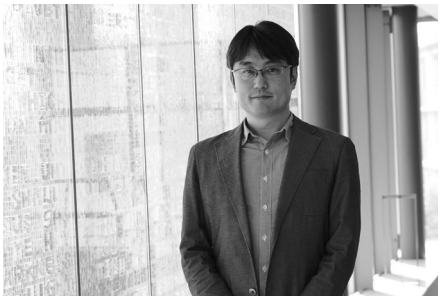
Exchange

Smile

『受けるよりは与える方が幸いである』

―新約聖書　使徒言行録　第20章35節

刊行によせて



聖学院大学ボランティア活動支援センター　所長
政治経済学部　准教授
若原　幸範

2020 年度からボランティア活動センター所長になりました。2018 年に本学に着任して以来、ボランティア学生やセンタースタッフの様子を外から見てきて、その活躍ぶりに感心しておりました。本年度からその責任者になり、光栄に思いつつ同時にプレッシャーも感じているところです。これまでのセンターの蓄積を受け継ぎつつ、さらなる発展をしていけるよう最大限に努力していく所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、2020 年度のセンター活動報告の大部分は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミックへいかに対応してきたか、ということになります。従来、ボランティアと言えば人と人とが直接出会い、助け合い、協力し合うことにこそ価値があると考えられてきましたし、それ自体は今後も変わらないと思います。

COVID-19 は人と人とが直接出会うことを不可能にし、それはボランティア活動をも不可能にしてしまうように思われました。この状況を切り開いたのは、やはり学生たちの力でした。何とかしてボランティア活動を続けたいという強い想いを持った学生たちが、様々な創意工夫により「オンラインボランティア」という新しい活動を創造してくれたのです。センタースタッフもその想いに全力で応えてきました。ここで生み出された「オンラインボランティア」は、対面でのボランティア活動を実施できない状況を補うにとどまらず、ボランティアの世界そのものを拡げたと言って良いと私は考えます。本報告書は、その歩みをつづった貴重な記録であると自負しております。ボランティアに関心のある多くの方々にご高覧いただけることを願っております。

目次

刊行によせて 3

ボランティア活動支援センター　　所長　若原　幸範

特別編集　聖学院大学震災復興シンポジウム　聖学院大学と被災地の歩み 6

新入生のボランティア意識調査

―「2020 年度ボランティア活動に関わるアンケート」から― 21

センター年間行事一覧 23

各事業報告 25

1. **ボランティアの人材育成とその担保に関する事業** 26
   - （1）　学内ボランティア団体の育成支援
   - （2）　学生サポートメンバー養成講座（9 期）の実施
   - （3）　視野を広げるボランティア教養講座の実施
   - （4）　コロナ禍におけるボランティア活動機会の創出
2. **学内の諸ボランティア活動の連絡、協力および支援に関する事業** 36
   - （1）　学生サポートメンバー（サポメン！）との連携
   - （2）　ほたる祭りの実施
   - （3）　授業等への協力
   - （4）　ボランティア・まちづくり活動助成事業の実施
   - （5）　聖学院大学復興支援ボランティア交通費補助金
3. **復興支援ボランティア事業** 44
   - （1）　東日本大震災復興支援ボランティアスタディツアーの実施
   - （2）　釜石「キッズかけっこ教室」の実施
   - （3）　釜石の高校生×聖学院生による釜石〇〇プロジェクトの実施
   - （4）　「マイ・タイムラインを作ろう」の実施
   - （5）　「被災地と共に歩む～聖学院大学卒業生による復興支援員活動報告会～」の実施
   - （6）　震災復興シンポジウム「聖学院大学と被災地の歩み～東日本大震災から 10 年を覚えて～」の実施
   - （7）　「3.11　あの日から 10 年　～未来への祈り～」の配信
   - （8）　関連機関との連携
4. **学外のボランティア情報の紹介とその活動の支援に関する事業** 51
   - （1）　ボランティアコーディネート業務
   - （2）　「ボラフェス！2020」の実施
   - （3）　地域イベントへの参画
   - （4）　学外団体からの相談対応
   - （5）　コーディネーターのスーパーバイズ

5. ボランティア活動の記録と広報に関する事業 55
（1） ボランティア情報の発信（メルマガ・LINE@・Teams・ホームページ・Facebook・掲示板）
（2） ボランティア活動支援センター広報活動
6. その他の事業 58
（1） 視察・研修記録
（2） 視察対応・活動発表・講師対応・外部委員
（3） 学内他部署との連携
（4） 法人内での連携
（5） 他大学との連携
資料集 63
（1） ボランティア活動支援センター内規
（2） ボランティア活動支援センター運営委員一覧（2020 年度）
（3） ボランティア活動支援センター運営委員会協議事項
（4） メディア出演・掲載
（5） 広報ポスター各種

特別編集　聖学院大学震災復興シンポジウム
聖学院大学と被災地の歩み
ー東日本大震災から 10 年を覚えてー

聖学院大学では、2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災直後より、学生・教職員が力を合わせ、被災された地域の皆様との関わりを持たせていただいてきました。震災から間もなく 10 年の月日が流れようとしているなかで、改めて、震災と私たちの 10 年の歩みを振り返るとともに、これからについて参加された皆さまと一緒に考える機会として、シンポジウムを開催しました。

開催日時:2021 年 3 月 7 日(日)13:30～16:30　YouTube より生配信
主　　催:聖学院大学
　　聖学院大学ボランティア活動支援センター
　　聖学院大学地域連携・教育センター
プログラム:
●開会挨拶　清水正之(聖学院大学学長・理事長)

●シンポジウム Ⅰ「聖学院大学と被災地との歩み」
　進　　行　　平修久(聖学院大学副学長)
　パネリスト

蛭間龍矢(コミュニティ政策学科 2011 年度卒)
東日本大震災発生直後、宮城県石巻市で泥かき作業に従事するとともに、高校時代から取り組んでいるライフセーバーの資格を活かし、2 か月にわたって岩手県山田町の海で行方不明者捜索活動等に参加した。現在は株式会社行雲の代表取締役として野外教育事業を展開している。

山口雄大(人間福祉学科 2013 年度卒)
復興支援ボランティアチーム SAVE 初代共同代表、釜石の復興の象徴である桜を届ける「桜プロジェクト」の発起人。復興支援活動を通して、地域の支えあいの重要性を実感し、現在社会福祉法人荒川区社会福祉協議会に勤務。卒業後も現在に至るまで、後輩たちの活動を見守り続けている。

菅野雄大（こども心理学科 2018 年度卒）

震災当時中学生で、宮城県仙台市において実家が被災。避難所生活を送る。全国から駆け付けたボランティアとの交流を通して、自身も復興支援のボランティアとして活動し、聖学院大学において復興支援団体 STEP.を立ち上げる。現在会社勤めをしながら、語り部活動を継続している。

●釜石からのメッセージ　市川淳子氏（釜石市鵜住居地区主任児童委員）

●シンポジウムⅡ「今、そしてこれから」

進　　行　　若原幸範（聖学院大学ボランティア活動支援センター所長）

パネリスト

玉之内菖（心理福祉学科 3 年　復興支援ボランティアチーム SAVE 代表）

1 年生の春より SAVE に所属し、現在代表を務めている。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大により活動拠点である岩手県釜石市での活動が叶わなかったが、「震災を風化させない」を合言葉に昨年夏オンラインスタディーツアーを実施した。

山下佑太（心理福祉学科 3 年　復興支援ボランティアチーム SAVE）

1 年生の夏に参加した、復興支援ボランティアスタディーツアー「よいさっ！プロジェクト」がきっかけとなり SAVE に所属。活動を通じて震災の出来事を次世代に伝える大切さに気付き、昨年度には防災講座を企画し、母校である聖学院小学校や中学校の授業の一環で講座を実施した。

●閉会挨拶　渡邉正人（聖学院大学地域連携・教育センター所長）

開会挨拶

清水正之（聖学院大学学長・理事長）

東日本大震災から 10 年が過ぎようとしています。これまで復興の手助けに関わった聖学院の関係者、釜石の関係者の皆様にお集まりいただき、あらためてお亡くなりになった方々を追悼するとともに、お世話になった方々のことを思い起こす機会としたいと思います。また、私たち自身の活動の歩みを振り返り、これからの私たちの歩みを確認する会としたいと願います。

聖学院と被災地、特に、釜石・大槌地域との関係は震災直後から始まりました。学生、職員が協力して被災された方々との交流を持つこととなりました。このようなことを考えるときに、点と線、あるいは面ということを考えます。

私自身は 2015 年、学長に就任するまで釜石との関係は小さな点と線でしかありませんでした。父が学徒動員で軍隊に行ったときに、同僚が釜石で輸入品を扱うモダンな商店を経営していました。また奥様は医師免許を持った方で、ご主人と共に商店で働かれていましたが、医師免許を活かし、その後釜石にとって重要な役割を果たされました。私の両親はその小さな点を通して医療品を釜石に送ることに手を貸しており、私も家族の一員としてそのことに関わっていました。

2015 年、学長に就任し、初めて、夏の「よいさっ！プロジェクト」に参加し、あらためて聖学院の取り組みを知り、点が徐々に体験を含む面へと変わっていきました。その最初の参加の時には、あえて気仙沼からバスで北上し、釜石に至るまで、特に陸前高田の惨状を見つつ、心に刻み、釜石に到着した次第です。今触れた父の知人の奥様である女医先生に父からの伝言を頼まれ、またお見舞いを兼ねてあらためて訪問したのは、その年の秋でした。そのときは北から南下し、釜石に至るという行程をとり、その惨状を見ることを選びました。女医先生である丸木絢子先生は、すでにご主人を亡くされ、被災されていらして、病院の病室に住まいを移されておりました。翌年、脳梗塞で突然倒れて、92 歳でお亡くなりになりました。こうした点でしかなかった釜石との出会いも、聖学院の関わりの一端に加えていただくことで、大きく質的に変わって今に至ります。

そもそも聖学院と釜石との関わりも、ひとつひとつの少ない点が、釜石の方との交流によって線となっていったと聞いています。私たちの小さな点の関わりが、出会いが、点が他の点を結び、線となり、さらに面となって、点から面への転換ということは大きな意味を聖学院として持ってきたと思います。救援物資を届けるという一方的な支援から、釜石の方々との出会いがあって、想いを届け、元気を届け、交流へとつながる面が、そしてさらに面ができ、場ができ、体験し、例えば味わうとか、身をもって知るということを通して、学びを広げていく、こう

した人間の関わりは私たち聖学院大学が目指す、他者との交わりのかたちの具体化であったと感じています。

大学の学びが、身体によって、ひとつの体験を通して、実践知となっていくことを私たちのプロジェクトは示したと思います。

さて、釜石との関わりは2014年、釜石市と聖学院大学との連携協定として、一層の結びつきを強めました。聖学院大学復興支援ボランティアチーム【SAVE】は、発足して10年となります。年3回のボランティアスタディツアーの実施、4月の「桜プロジェクト」、8月の「よいさっ！プロジェクト」、12月の「サンタプロジェクト」、この3つの支援活動が主な活動となりました。それぞれは小さな点から始まり、そして面となっていったプロジェクトであります。また、一方で忘れてはならないのが、盆栽桜をお届けするプロジェクトでは、大宮の清香園が関わり、あるいは大学同窓会も協力、援助してくださっており、また聖学院高等学校の参加など、我々の活動は大きな面に支えられていますし、私たちの活動の大きな広がりは、こうした面に支えられていることを思い起こすことも重要なことだと思います。

さて、行政主導の復興から、さらにそれぞれの被災者の皆さん、支援者の皆さんの自立的な立ち上がりが求められています。行政の関与の外にある活動が、私たちの活動の核心だと思いますけれども、こういうことが釜石から評価され、他の10の団体と共に、昨年、表彰を受けたことは評価もさることながら築きあげてきた人間的なつながりの確かさをお認めいただいたことを覚え、あらためて感謝申し上げたいと思います。学生、教職員、そして釜石の人々だけでない、またそれぞれにつながる人間的なつながりに、わたしたちは連なっているわけです。対話し、共感し、実践する力の、私たちの源でもあり源泉でもあります。折しも、釜石市は第2期釜石市人口ビジョン・オープンシティ戦略を昨年発表されました。官民協創、官と民がともにつくるオープンイノベーションをそこで提唱されています。

こうした釜石市の方向性にどのように私たちが今後関わっていくのか。９つの目標を釜石市は掲げていますけれども、私たちもまさに「撓まず屈せず」復興の歩みにどうかかわっていくのか考えるのも今日の会が大きなきっかけとなると思います。

残念ながらこの１年、私たちの活動は十分にできない状態でした。その中でも復興支援“オンライン”スタディーツアーは８月に２日にわたって行われました。そして、釜石との交流がそこで行われました。私たちの交流、復興への手助けが全面的に再開できる日が必ず来ると思っています。その日の用意を万全に整えていきたいと思います。そのためにも、今日の試みは大変意味があるものであろうと思います。そして期待を込めて冒頭のあいさつとさせていただきます。

シンポジウムⅠ
「聖学院大学と被災地との歩み」

蛭間龍矢（政治経済学科 2011年度卒）

私が取り組んでいたボランティア活動の内容は、岩手県山田町でのご遺体の捜索です。高校からライフセービングという競技

を始め、大学時代は湘南の海に毎日のように通い、3〜4年の間に大学を1年間休学しハワイへライフセービングの資格を取りに行きました。その後ボランティア活動に従事することになりました。

自分の気持ちに正直に

震災1週間後くらいに、石巻に1週間ほど滞在し、泥出しボランティアを行いました。被災地へ向かう前、家族や先生、友人からは、「放射線大丈夫？」、「ボランティアの人はそれなりの装備がないとだめだよ」、「大学の授業はないの？」など色んな視点で色んな意見をもらったのですが、それを一度無視し、自分の「被災地に行きたい」という気持ちに正直になり向かいました。

山田町へ

泥出しのボランティアをやっていた際、自衛隊の方がやっている土葬をするための穴を掘る作業にマンパワーが必要ということで一度だけお手伝いをしました。私はそれを「大切なことなのではないかな」と思ったので、石巻から帰った後、ライフセービングの仲間からご遺体の捜索のボランティアをやらないかと声をかけてもらった時は、「やる」と決め山田町へ向かいました。その当時は「人命優先。生きている人を守るんだ」というエネルギーがすごかった気がしていて、遺体の捜索にかかわるボランティアをしていると、「手が足りないからこっち（泥出しなど別の活動）に来てほしい」と言われることも多かったです。10年経った今思うのは、当時自分がやったことが自分の中で初めて意味のあることに代わっていっている気がする、ということです。私は27体のご遺体の捜索に関わったのですが、最初は道具を出したり、周りのサポートに回っていました。5体目の捜索の際、衝撃を受け精神的に参ってしまい、下痢や嘔吐、夜も眠れない状態が続きました。その時、「ボランティアは自衛隊や警察の方のように仕事としてやっているわけではないから、3日目以内に体調が戻らないなら帰ってもよいのではないか。そこまで自分を酷使し続けることはないよ。」と声をかけてもらい、2日間寝続けました。目を覚ましてからふと、「遺体安置所へ行きたい」と思い、当時、車はまだ貴重なものでしたが町の方から借り少し遠くの安置所へ行かせてもらいました。枕元に置かれた遺留品やその写真を見て、ご家族の方が身内を探すという場所です。偶然、寝込む前に関わった5体目のご遺体にご家族の方が「おかえり、おかえり」と言いながら抱き着く瞬間に立ち会いました。「彼と一緒に作ったんです」と結婚指輪の話をしてくださって、その時「僕のやっていることは間違いじゃなかった」と思えました。そのままそこから3カ月半、ボランティアとして遺体捜索に関わらせてもらいました。その当時私は23歳だったのですが、今は32歳になり結婚しました。学生当時は夫婦の絆とか、そういうものが分っているようで分っていなかったけれど、今なら分かる気がします。

自分の想いを伝えながら活動をつくる

僕自身は家族や先生の判断を差し置いて震災後間もない被災地へ向かいました。社会に出てみて、みんなが納得した形で、合理的に、理論的に、そして安心して活動できる状態を、周りの協力者に自分の想いを伝え

ながらつくり上げることの大変さと重要性を感じています。また、一つ特化しているチームよりは、メンバーみんながアイデアと情熱を持っていて、それぞれがその人なりに考え動いているチームの方が、活動場所で大切にされたり、大切にできるチームなのではないかと思っているのですが、今日のお話を聞いていて菅野さんと山口さんはそういうチームをつくったのだなと思いました。そのプロセスがすごいなと思います。

意図しないこととの出会い

私は今も山田町の復興のプロジェクトに関わっており、震災当時一緒にボランティア活動に取り組んだ仲間と、町にお金を落とすような取り組みを始めようとしています。

学生時代から続けてきたボランティア活動を通して、意図しないことに出会い続けることが人生だなと感じています。生きている意味は常に変わり続けるし、人生の転換期や自分がわくわくドキドキすることは意図しないこととの出会いからきているなと思うので、これからもそういうものに出会えるように生きていきます。

山口雄大（人間福祉学科 2013 年度卒）

学生時代私は復興支援ボランティアチーム SAVE に所属しながら、岩手県釜石市の復興支援活動に取り組みました。釜石に行くと毎回 2 キロ太るくらい、美味しいものを食べた思い出があります。復興支援活動に関わる中で、地域の支え合いや顔の見える関係づくりの必要性を感じ、自身の仕事にしていきたいと感じたため、現在は社会福祉協議会に勤めています。

日を追うごとに自分事に

震災当時、私は大学 1 年生でした。テニス部に所属しており、ちょうど練習後に大学の最寄り駅にいた時に揺れました。東京に地震が来ることは言われていたので「ついにきたか」と思ったことは覚えています。電車が運転見合わせだったため、隣駅の大宮まで友人と歩いて行き、避難場所として開放されていたデパートへ避難しました。テレビで津波が町を飲み込む様子を目の当たりにして、大変なことが起きていると気づきました。翌日はアルバイトをしていたスーパーのシフトが入っており「出勤してくれ」と言われたので驚きながらも出勤しましたが、商品は何もなく、「こういうところにも影響があるんだな」と日を追うごとに自分事になっていった様な感じです。

「自分でも何かしたい」

当時、私は毎日ゲームをしているような模範とは程遠い学生時代を送っていました。震災後「テレビだけではなにも分からない。自分でも何かしたい」という気持ちを抱き、ネットでボランティアを検索したのですが、

対象が 20 歳以上のものばかり。当時 19 歳であった自分は諦めかけていました。

しかし、ある時友人に誘われ、友人が関わるミュージカルを見に行った際、その友人や他の学生がとても輝いていて「自分は一体何をしているんだ。ボランティアを始めないのも全部環境のせいにしていたが、自分次第だ。このまま大学生活を終わらせていいのか。」などと思い始めました。そんな折、大学で復興支援ボランティアセンターが立ち上がり学生スタッフを募集することを知り、「自分を変えるきっかけにしたい」と飛び込みました。

桜プロジェクト

SAVE という団体は大学が組織的に作ったという背景があったので、最初は受け身でした。活動をしていく中でそこに違和感を持ち始め、被災地で一緒に活動した大人のボランティアの方に相談すると、「やりたいことがあるならやればいいじゃん！」と背中を押してくれたんです。「そうだよな！」と自分でもスイッチが入り、今自分に何ができるか、何なら喜んでもらえるかと改めてよく考え始めました。

そこで、桜の植樹という案が浮かびました。しかし、当時は塩害被害などもある中で、植樹をしても取り除かなくてはいけないかもしれないという状況。そんな時、大学の職員の方が桜の盆栽を提案してくださいました。「大宮に盆栽町というところがあるぞ」と。盆栽なら一か所に集まらなくてもみんなで春が来たことを楽しめるし、桜は復活の象徴と言われていますし、ぴったりだと思いました。震災で多くのものを失ったかもしれないけれど、桜を通して新たな出会いとか出発というメッセージを伝えたいと思い、「桜プロジェクト」を提案しました。企画書を先生方の前で発表した際に運搬ルートや費用などについて沢山つっこみをいただいたことで「大変なことを提案しているかも」と気づきましたが、学生にとっても、被災地の方々にとっても、喜び合える活動だと思っていたので、情熱的に進めていきました。自分はこれがしたいと言い続けたこと、色んな人の熱意が重なって、大学を巻き込んだプロジェクトになっていったと思います。

また、桜の株分け作業も、学生と地元の方と教員みんなで集まって行いました。釜石の民生委員の方が仮設住宅に住む方々に声をかけてくださり、広場に集まりました。「こういう手作業好き」等、喜びの言葉をもらったことが記憶に残っています。

初回の「桜プロジェクト」での桜の株分け作業の様子

また、大宮駅や上尾駅、駒込駅などで活動のための街頭募金活動もしました。SAVE には色んな学科の学生が所属していたので、学生がつながりのある先生方にもお声がけし、募金を集めました。

とりあえずやってみる

街頭募金、学内募金、ヴェリタス祭出店、ラッピーちゃんというキャラクター作り、「東北復興アイデアコンテスト」参加、など

チームで様々なことをやってきました。常々メンバーと「何がしたい？」というのは話し合っていて、とりあえずやってみる姿勢で進めていきました。私がみんなからいじられやすいキャラクターというのもあり（笑）、勝手にみんながまとまってくれた気がします。そして、「何かをしたい」という共通した気持ちがあったから、団体としてまとまったんじゃないかと思います。

「桜プロジェクト」まではリーダーがいませんでした。「団体ってリーダーが必要ですかね？」とボラセンに相談に行くと、「必要と思うなら、山口くんがやっちゃえば？」と言われたこともあり、一緒に活動していた坂口さんと共同代表になりました。坂口さんは縁の下の力持ち。私は後先考えず突っ走ってしまうタイプなので、彼がコントロールしてくれました。

ボランティアは相手がいて成り立つ

卒業式に、釜石で毎年会っていた小学生の姉妹から祝電が届きました。学生時代に取り組んだことがこういう形で返ってくるのかと、感激したことをよく覚えています。最初は「被災地のために何かしたい」と思って活動していましたが、ボランティアは相手がいて成り立つもの。ボランティアを必要としている人がいるから僕たちはボランティアをすることができます。想いをどう繋ぐか、届けるか、というのを考えて還元していくなど、ボランティアから一つのモノの見方を学びました。また、復興支援活動を通して、防災の大切さについても改めて気づくことができました。

生きていくことの原動力

私にとって物事を主体的にとらえる楽しさを味わえたのがボランティア活動でした。自ら率先して動くことで知らない価値観や人と出会い、そこから生まれた達成感や感動が生きていくことの原動力になるのかなと思います。「盆栽桜を通して地域の交流が生まれました」という反応をもらったことで、「被災地だけではないな、自分の住んでいる地域では顔の見える関係性が築けているだろうか」、と考えるきっかけとなりました。今の仕事をしているのも、そこでの気づきがあったからです。色んな人と触れ合ってきたことで今の自分は在るので、一人の人間としてこれからも今まで出会ってきた人にがっかりされないように生きていきたいと思います。

菅野雄大（こども心理学科 2018 年度卒）

宮城県仙台市で中学 2 年の時に被災をしました。自宅は 3 メートルの津波が来て全壊。そこでボランティアさんと出会ったことがボランティアを始めたきっかけです。高校は仙台市内に進学しましたが、大学は「こども心理学科」のある学校ということで埼玉に一人上京しました。大学でも様々なボランティアに関わり、今の私があります。今日は経験談などお話しできればと思います。

切羽詰まっていた

震災当時は中学校で授業中でした。停電になった中、同級生がスマホのテレビでニュースを観ていて、仙台空港の上空から映

された画面に津波が映っていました。「ここまで水が来ているなら自分の家にも来るだろう」ということで、その後避難所へ移ります。コンビニには人がたくさん並んでおり、中には会計をせずそのまま持っていく人などもいました。当時はあまり実感がありませんでしたが、そういう状況だったことを思い出すと大変だったんだなと思います。2〜3週間くらい避難所で生活し、どんどんストレスが溜まっていきました。小学校の教室を思い出してもらえると分かりやすいと思うのですが、あの1教室の空間に6，7世帯の家族が壁もない状態で生活をするという状況です。本当にしんどいものがあります。例えば、記者の方が許可無しでカメラのシャッターを1回押しただけで怒鳴り声が上がるなど。もちろんメディアの大切さは理解していましたが、些細なことでみんなの関係性が崩れていくという状況でした。でも、電気が通った時は拍手が上がったり、温かい瞬間もありました。

ある時、毛布を自宅へ取りに行く際、道すがら自衛隊の方に止められたことがあります。その時「一人で行ってください」と言われました。家族分を取りに行くため一人では無理だったので理由を聞くと、また大津波が来るかもしれず、3人犠牲になるよりは一人のほうがよいという理由でした。みんな、言い方や相手がどう思うかなど、考えが及ばないくらい切羽詰まっていたのだと感じます。

気が付いたらボランティアをする側に

僕の地元には、日本全国、海外からも何百人というボランティアが来てくれました。最初は受け入れる側だったのですが、ある人に誘われ、いつの間にか気が付いたらボランティアをする側にもなっていました。高校1年の時、大学生の方々とボランティア活動をしていると、同級生から「なんか楽しいことしてるじゃん」と声をかけられるようになっていきました。当時募集していたボランティア活動は20歳や25歳以上対象のものが多かったのですが、ボランティアの楽しさやそれを通しての出会いの素晴らしさを同級生にも伝えたかったので、高校生の時にボランティア団体を自分で立ち上げ、約200人の高校生と活動しました。

私は「ありがとう」という言葉が一番好きです。私たちがやったことで元あった生活に戻れるなら、その手伝いをする。元あった生活に戻りたいというのがあの時の皆さんの思いで、若い力で何かできるなら、ボランティアをする側になろうと思い行動しました。

「仙台と埼玉って繋がっているんだ」

地域貢献系のボランティア活動をしていく中で、「やはりボランティアは楽しい」と実感し、こういう話を宮城県だけでなく関東の方々にも伝えたいと思ったことが、埼玉の聖学院大学に進学した理由です。進学が決まった段階で、防災のボランティア団体を立ち上げたいと思いました。入学式の時には既に団体名を考えており、授業初日に大学のボランティアセンターへ向かいました。仙台でボランティア活動を一緒に取り組んでいた先輩が、ボランティアセンターの職員と知り合いで、自分のことを知らせてくれていたため、団体の立ち上げはスムーズでした。もちろん、既に震災復興の活動をしていたSAVEに入ればいいじゃん、と

いう声もありましたが、メンバーに直接自分の思いを語り掛けたかったため、当時のSAVE代表と話し合い、新規団体『STEP.』の立ち上げに至りました。人との出会いによってそこまで繋がったことで、「仙台と埼玉って繋がっているんだ、ボランティアってすごいな」と感じました。

自分たちのやり方で楽しく

STEP.は1年目に約30人のメンバーが集まりました。例えば、人と話すのは苦手だけどモノを運ぶのは得意な人とか色んなメンバーがいましたが、みんなを現地に連れて行きました。ボランティアって、参加するのが難しそうとか、ボランティア活動支援センターの扉を開けるのが怖いな、とか、参加するまでの障壁があると思います。メンバーにはいい意味で「軽くやっていいよ」、「自分たちのやり方で楽しくやればいいよ」ということを強く伝え続けました。

STEP.での活動の様子

こども心理学科で勉強をしていたのですが、活動をしている中で障がいを持つ子どもたちと出会い、何もできない自分に気づきました。それが障がい児教育について大学で学ぼうと思ったきっかけになりました。

人生を変えるきっかけ

私は農家の長男として生まれたので、地元で進学して、地元で農業をするのだろうな、と漠然と思っていましたが、ボランティアというものに出会って自分の未来が変わりました。私が出会ってきたボランティアの皆さんは、「東京から自転車で仙台まで来ました」とか、「海岸沿いを歩いてきました」とか、自分が考えていた『人生のレール』みたいなものからかけ離れている人が多かったです。そこでの出会いから、「県内で進学しなくてもいいのか」という選択肢が自分の中に生まれ、人生を変えるきっかけとなりました。人生は色んな出会いで変わっていくことを実感したのが自分のボランティア活動といえます。後輩たちには、楽しいことをたくさんやって、頑張っていったら『自分ならではのレール』が開けると伝えたいです。

シンポジウムⅡ「今、そしてこれから」

玉之内菖（心理福祉学科3年）
（復興支援ボランティアチームSAVE現代表）

2020年度は復興支援ボランティアチームSAVE代表として活動しました。また、外部のボランティア団体でインターン生としても活動しています。

私のターニングポイント

2011年3月11日、私は埼玉県越谷市にある小学校の5年生、11歳でした。卒業式準備などがあり、教室にいた記憶があります。14時46分、強烈な揺れに襲われて、周りもパニック状態、私も恐怖と不安に駆られました。その後、テレビでは震災関連のニ

ュースしか流れなくなってしまい、埼玉でも計画停電や給食が少なくなるなどの影響がありました。

東日本大震災から7年経った18歳の春、私は聖学院大学に入学しました。ボランティア活動に出会って、東日本大震災と向き合い始めた年でもあります。そして震災から10年経った21歳の今、復興支援ボランティア団体の代表を務めています。

向き合い始めたきっかけ

私が東日本大震災と向き合い始めたきっかけはSAVEに入って、スタディーツアーで岩手県釜石市に訪れたことでした。始めはよく分からず軽い気持ちで行ったのですが、釜石市にある宿、宝来館の裏山に作られている避難道を自分の足で歩き、そこからの景色を見た時、その気持ちは変わりました。その道は震災当時、実際に多くの人の命を救った道でもあります。宝来館は海の目の前に位置していて、津波の影響も強く受けました。ツアーの中で、実際に避難道に登って、当時その場所から撮影された津波の映像を観て、自分が震災を他人事として捉えていたことを思い知らされました。

もちろん、東日本大震災のことは知っていました。しかし他人事になっていた原因として、埼玉県という土地柄が影響しているのかなと私は考えています。私の地元の越谷市は山もなければ海もありません。仮に台風などの災害が起きたとしても、大きな被害に見舞われることはまずありません。そのため防災教育などあまりきちんと受けたことがありませんでした。同じ日本に住んでいるのに、何が起きたかを知らなかったし、知ろうともしなかった自分に衝撃を受けて、復興支援活動に関わり始めました。

復興支援ボランティアチーム SAVE

私が復興支援活動に関わり始めようとしたきっかけを作ったツアーを行っていたのが、今私が代表を務める、復興支援ボランティアチーム SAVE です。SAVE は Seigakuin All Volunteer Effort の頭文字から来ています。SAVE は 2012 年に設立され、活動拠点の岩手県釜石市を年に 3 回ほどツアーで訪問し、寄り添いを大切にしながら現地の方々と活動を行ってきました。2020 年度以前の活動は、春の「桜プロジェクト」、夏の「よいさっ！プロジェクト」、冬の「サンタプロジェクト」になります。春は、盆栽桜を届ける活動が中心で、2019 年度には盆栽桜のお手入れ方法を伝授するプログラムを開催しました。夏は釜石市で開かれている「釜石よいさ」という夏祭りへの参加、冬は主に子どもたちを対象としたクリスマス会や、現地のお母さん方と郷土料理をつくる活動をしてきました。

「サンタプロジェクト」子どもクリスマス会の様子

私自身、最初は軽い気持ちで参加しましたが、釜石に何度も足を運んでみて、うまく言葉では言えないのですが、現地の人の温かさや空気に触れてきました。悩んだ時期もありましたが、行きたい、会いたい、「あの人元気かな」という思いがいつもありま

す。それが私の原動力だと思います。

活動を通しての気づき

これまでの活動を通して、沢山の気づきをいただきました。

1つ目は、災害を他人事として捉えてはいけないということです。復興支援活動から学んだことで、自分も被害にあった場所を目の前にしながら当時の映像を見たことによって、「自分も被災者になるかもしれない」ということを実感したことが大きいと思います。

2つ目は、被災経験が無くても、活動した者、学んだ者が伝える努力をするということです。この3年間、現地に行くのみならず、学んだことを伝える活動も同時に行ってきました。被災経験がない自分に何ができるのか分からなくなって悩んでしまい、現地に行けなかった時期もありました。そんな中で、東日本大震災を振り返るイベントの実行委員を2回務めました。このイベントから、想いと熱意があれば伝わるということをとても実感しました。

“オンライン“スタディーツアー

今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、現地へ行く目途が立たなくなってしまいました。ですが、メンバーたちで模索して、夏にオンラインを活用したツアーを開催することが叶いました。釜石のお土産紹介、宝来館の女将さんと繋いでお話を聞いたり、Googleマップを使った名所紹介など、ツアー自体はとても好評で、「またやってほしい」という声もありました。私自身も「まだまだやれることはあるんだ」と思いました。

一方で、画面越しで伝えるということの難しさもありました。事実だけ、現状だけなら、画面越しで伝えられることもありますが、においや空気感は伝わりづらく、新メンバーの加入に繋げることが難しかったです。

形を変えてでも

私が代表を務めたSAVEは、団体としての活動は2021年度から休止に入ることが決まりました。震災から10年目を迎えようとする年に「休止」という決断を下すことは非常に悩みました。半年以上、メンバーと話し合いを繰り返し出した結論です。新型コロナウイルスの影響も少なからずあると思っています。オンライン授業になったり、生活が目まぐるしく変わっていく中で現地に行けないことも重なり、活動に対するモチベーションを保つのに苦労しました。1年生のメンバーが加入しなかったことも大きいです。それでも私は卒業するまでは、ボランティア活動支援センターと協力しながら、復興支援活動を続けるつもりです。続けることが、SAVEの代表としての最後の責任と考えています。

そして後輩たちが形を変えてでもいいので、再びSAVEを動かしてくれることを望んでいます。再び動かすとき、後輩たち自身で考えて動いてくれることを期待しています。これは休止の決断を下したメンバーたち全員の想いでもあります。動かす過程で私たちが必要になったらいつでも呼んでください。協力します。

幅広く福祉の世界で

最後に個人としての展望です。来年度4年生になります。学生ボランティアとして

活動できる時間も少なくなってきます。それでも在学中はもちろんですが、卒業してもボランティア活動を続けていこうと思っています。
私の夢は、学び続けてプロとして福祉の道に進むことです。現在社会福祉士を習得するために勉強中です。自分の専門の分野のみならず、幅広く福祉の世界で活躍することができるように、これから頑張っていきたいと思っています。

山下佑太（心理福祉学科 3 年）（復興支援ボランティアチーム SAVE）

SAVE では副代表を 2 年間務めさせていただきました。そして私は小学校、中学校、高校、大学と聖学院で学んでいます。母校で防災教室を行う活動もしています。

講堂のガラスが波を打って

2011 年 3 月、私は聖学院小学校 5 年生で、発表会の真っ最中に地震が起きました。ものすごい揺れがあり、講堂のガラスが波を打っていて恐怖を覚えたことをよく覚えています。校庭に急いで避難をして、揺れが収まってから荷物を取って、安全な図工室に移動しました。先生が持っていた携帯電話を借りて家族に連絡を取ろうとしたけれど、回線がパンクしており、なかなか繋がらない状況でした。唯一、公衆電話は繋げることができたので、家族に迎えに来てほしいと伝え、夜の 6 時ごろ迎えに来てもらいました。私は南北線という電車に乗って通学をしていましたが全線運休で、また道路も渋滞していたのでバスも来ない状況でした。家族と一緒に歩いて 1 時間かけて自宅へ帰りました。地震の影響で、ガラスが散乱していたり、壁が倒れていたり、危険な箇所がたくさんありました。コンビニの商品がかなり減っていたことが印象に残っています。

その経験から、夏休みの自由研究では、「僕の避難日記」と題して、自宅から小学校まで歩き、どこに病院、消防署や警察署、避難場所があるのかを確認しながら歩き、まとめたものをつくりました。

他の人にも伝えたい

大学入学時には、ボランティア活動を行いたいと思っていました。講義で先輩と対談の機会があり、SAVE の活動について熱い想いを聞いたことが SAVE で活動を始めたきっかけです。

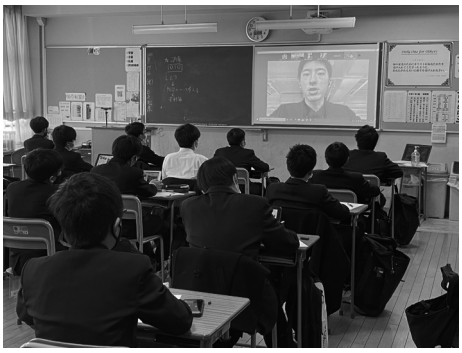
大学 1 年の時に初めてツアーに参加しました。『釜石よいさ』で踊りを踊ったり、現地の方から直接話を聞いたり、また、帰ってきて経験を反芻してみたりする中で、SAVE の活動を通して学んできたことを他の人にも伝えたいと思ったことが、今取り組んでいる防災教室の活動に繋がっています。母校でもある聖学院小学校、聖学院中学校での防災教室を友人と一緒に企画しました。「自分の身は自分で守ること」、「地域の人と支え合うこと」、「日々の中で災害に備えること」の主に 3 つを授業で伝えてきました。

2020 年度、防災教室も新型コロナウイルスの影響を受け、中止になることもありました。しかし、コロナ禍でも伝えていきたい、このまま震災を風化させてしまうのも違う、という思いがあったので、オンラインでの防災授業を企画しました。先月聖学院

中学校で、オンライン防災教室を行いました。

自分事として捉えて備える

これまでの活動の中で、「自分の目で見て知ることが大事だ」ということを感じています。新聞やテレビで知る情報には限界があるなと感じていて、自分の目で見て考え、自分事として捉えて備える、伝えていくことが大事だと学びました。防災講座では、まず、「自分の通学路を確認しましょう」ということ、「家族と避難場所や避難経路について話し合う」ことを伝えています。後輩たちには、見て学び、感じたことを自分の中だけに留めず、周りの人に伝えてほしいと思っています。



聖学院中学校の授業にオンラインで登壇した時の様子

私はまもなく 4 年生になりますが、伝えることを時間が許す限り継続していきたいと思っています。社会人になってからも、ボランティア活動を通して得た学びを生かしていきたいと思っています。

閉会挨拶

渡邉正人
（聖学院大学地域連携・教育センター所長）

蛭間さんが現地に行ったときに、大学がダメといった理由を聞きましたか？あのとき原発の事故があったので、放射能の状況がまだわからない段階で学生を送り出してよいのだろうか、という議論が実は学内ではありました。結局、蛭間さんはすぐに現地に向かったので、情報もまだまだ不十分、学生の安全を第一に考える、という大学の立場からしてみると、なかなか、行っていいですよ、とは言いにくい、そういう事情が実はありました。学生も守らなくてはいけない。ところが蛭間さんが活動から帰ってきて、状況が少しずつ分かり始めて、やはり、ボランティアをしたいという熱意を持った学生がほかにもいたので、放射能のあまり影響のない地域のボランティア活動であれば連れていけるのではないかと、徐々に送りはじめていったというタイミングになります。そのあと、大学でも学生の熱意をどのように受け止めるか、という議論が行われるようになり、その結果、ボランティア活動支援センターが設立され、山口さんの活動につながっていくのです。

つまり、点と点が結ばれるところが、蛭間さんと山口さんのラインです。ファーストインパクトが非常に大きくて、勝手に活動して帰ってきたと蛭間さんは話されましたが、大学にとっては、実はそれが一番大きい点でした。ようやく点と点で線になって、そういうふうにしてボランティア活動支援センターができて、面になったところに、そう

いう志を持った学生をどうすればスムーズに受け入れられるかと考え始めたところが菅野さんの時。

聖学院大学の10年の動きの中には、常にそういった学生の安全を守るとか、学生の熱意をどのように受け止めて実現していこうかという想いが実はあります。学生のほうも少し不器用、大学側も未経験だったので不器用なところがあり、組織なのでなかなか思うように動かなかったり、やはりいろいろな議論があったり、時にぶつかり合いがあったり、ようやく学生と共にこの10年、このように育ってきているというのがあります。ですので、ただ単にダメと言ったのではなく、そのような背景があったことを 10 年目の真実として受け止めていただけるとありがたいです。

この10年、震災があって、学生たちのそれぞれいろんな想い、熱意が原動力となって動いてきたということを今回確認すると同時に、やはり大学がどのようにしてそういった想いを実現させる場を用意するか、用意しきれなかった蛭間さんの時からようやく大学も10年、結構変わったなと思いませんでしたか？それから10年、変わってきたので、今後はまた違う目で見守っていただければいいなと思います。

本当に、今日の卒業生お三方は、大学がいろいろと葛藤する中で、立場を作り上げていくときに、この 3 人がいなかったらたぶん大学は変われなかった 3 人なのです。それはとても大事なことで、自分たちが動けば何かが変わるのです。そのことを確認させていただいたメンバーだったなというように思っています。

終わりの挨拶としては、学生の熱意は変わらない、ということが分かってきたと思います。大学も少しずつ変わってきたかと思います。では、これからをどうしていくのか、ということですが、また学生の皆さん、卒業生の皆さん、いろいろな方々とつくりあげていくということを確認できた場なのではないかなと思います。

登壇者の皆様、お聞きいただいた皆様、本日はありがとうございました。

【Data】
当日視聴者：
約100名
（一般・入学予定者・卒業生・学内外関係者）
メディア掲載：
2021年3月8日(月)
テレビ埼玉「情報番組マチコミ」
2021年3月11日(木)産経新聞埼玉版
2021年3月12日(金)読売新聞埼玉版

新入生のボランティア意識調査
―「2020 年度新入生アンケート」から―

1. 調査の目的と概要

聖学院大学ボランティア活動支援センターでは、新入生のボランティアへの意識や活動の意向を明らかにすることを目的として、IR 課・ボランティア活動支援センター共催でアンケートを実施した。

実施対象：2020 年度全学科の新入生及び編入生 621 名
回答数　：357 名
実施期間：春学期入学生・2020 年９月 15 日(火)～10 月２日(金)
　　秋学期入学生・2020 年９月 23 日(水)
実施方法：春学期入学生・Web にて回答
　　秋学期入学生・秋学期入学式終了後、アンケート用紙を配付・回収

2. 調査結果　※小数点以下は四捨五入で算出

(1)ボランティア活動への関心について

ボランティア活動に関心があると答えた学生は全体の 68%（242 名）となり、関心がないと回答した学生の 32%（115 名）を大幅に上回る結果となった（図 1）。

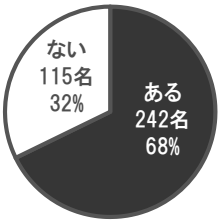


図1. ボランティア活動に関心があるか

(2)関心があるボランティア活動について

ボランティア活動に関心があると回答した 242 名の関心のある分野を複数回答で尋ねたところ（図 2)、最も多かったのは祭り・イベント 56%（135 名）で、次に多かったのが乳幼児・児童・青少年との交流・支援 42%（101 名）であった。

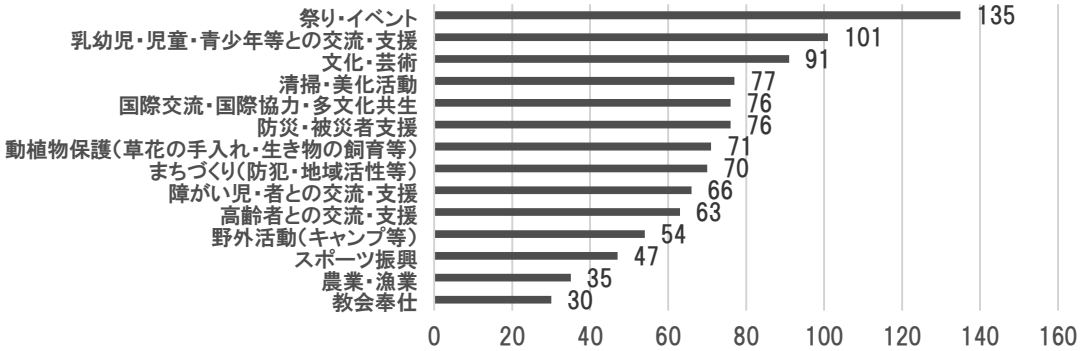


図 2. どのようなボランティア活動に関心があるか(回答者 242 名／複数回答可)

(3)聖学院大学に入学した理由

入学した理由のうち「ボランティア活動が盛んだから」の回答結果は下図（図 3）となり、「当てはまる」、「やや当てはまる」と回答した学生は全体の 45%（241 名）と５割近くの新入生が「ボランティアが盛ん」という認識でいることが分かった。

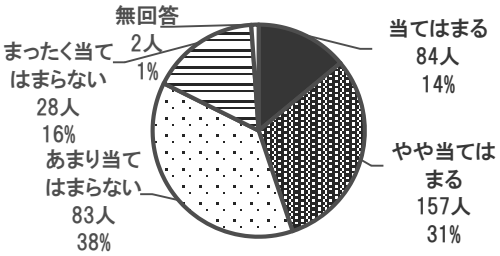


図 3.「ボランティア活動が盛んだから」という理由で聖学院大学に入学した学生の割合

センター年間行事一覧（主催・共催・協力事業等）

月	日	概要
2020年４月	22日	**第88回センター運営委員会**
６月	１日	日本財団学生ボランティアセンター共催ボランティアリーダー研修「オンライン会議を体験してみよう」実施
	２日	「ボラセンオンラインツアー」実施
	３日	**第89回センター運営委員会**
	8～22日	学生サポートメンバー養成講座（計３回実施）
	10日	「ボランティア交流会」実施
	17日	「コロナウイルスと私たち」オンラインワークショップ実施
	29日、30日	「ボランティア・まちづくり活動助成金」応募説明会
７月	１日	**第90回センター運営委員会**
	18日	「ボランティア・まちづくり活動助成金」オンライン面談
	30日	「子どもとボランティア」オンライン交流会協力
８月	12日	「チクチクタイム・マスクづくり」実施
	21日、９月９日	オンラインボランティアサポーター養成講座
	27日	「チクチクタイム・雑巾づくり」実施
	29～30日	「復興支援“オンライン”スタディーツアー」実施
９月	９日	**第91回センター運営委員会**
10月	７日	**第92回センター運営委員会**
	９日	「マイタイムラインワークショップ」実施
	23日	「新歓ボラ Tea」実施
11月	４日	**第93回センター運営委員会**
	10日	「新聞紙ごみ箱づくりワークショップ」協力
	18日	「新歓ボラ Tea@Remo」実施
	25日	「シトラスリボンづくりワークショップ」オンデマンド配信
12月	２日	**第94回センター運営委員会**
	２日	「ピアサポートとは？ピアサポーターとは？」実施
	23日	「子どもとボランティア」オンライン交流会協力
2021年１月	６日	**第95回センター運営委員会**
	８日	「ボランティア・まちづくり活動助成金」報告会実施

月	日	概要
2021 年 1 月	20 日	「被災地とともに歩む～釜援隊報告会～」実施
2 月	3 日	**第 96 回センター運営委員会**
	10 日、17 日	聖学院中学校中 1LLT 授業協力
	29 日、 3 月 1 日	埼玉県防災学習センター／未来をひらく～私と 3.11 のこれまでとこれから～実行委員会共催ボランティアサミット「未来をひらく～私と 3.11 のこれまでとこれから～」実施
3 月	7 日	「聖学院大学と被災地の歩み」実施
	9 日	「みつろうラップづくりワークショップ」協力
	11 日	「3.11 未来への祈り」

各事業報告

1. ボランティアの人材育成とその担保に関する事業

(1)学内ボランティア団体の育成支援

センターでは個人のボランティア相談のほかに、団体の活動相談にも応じている。活動に関するアドバイスや役立つ情報の提供に限らず、必要に応じてファシリテーターとして団体の会議に出向くこともある。

主な相談内容：

・組織運営に関すること
・メンバー間のコミュニケーションに関すること
・新入生のまきこみ方
・メンバーのモチベーションアップに関すること
・広報に関すること
・イベント出展内容に関して　　など

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大で、外部でのボランティア活動が出来ない状況となり、オンライン等自宅で取り組める活動への切り替えが必要となった。オンラインに関しては、未経験の学生がほとんどだったため、オンラインに慣れる講座やオンラインで活動するボランティア団体の立ち上げ支援等、次のサポートを行った。

ｉ）ボランティアリーダー研修「オンライン会議を体験してみよう！」

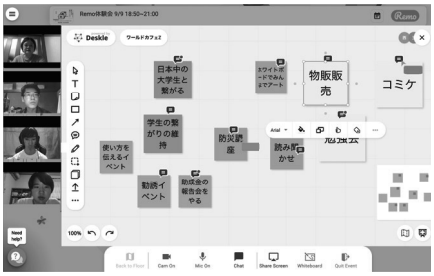
ボランティア活動に取り組むリーダー層を対象に、オンライン会議システムの基本的な使い方や、進め方、会議の準備方法等、基本的な手法を、実際にオンライン会議を体験しながら学ぶ場を日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との共催で実施した。

日　時：2020 年６月１日(月)18:15～20:15
　　Zoom 開催
共　催：日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）
参加者：学生７名
講　師：青木将幸さん（青木将幸ファシリテーター事務所主宰）
内　容：・導入（名前変更、マイクチェック、チャットの書き込み練習）
　　・自己紹介とチャットを使った質問
　　・「今日ここにいるメンバーに、ちょっと聞いてみたいこと」
　　・意見交換

ⅱ）オンラインボランティアサポーター養成講座

オンライン機器・ソフトの活用に関する基礎的な知識を持って、オンラインボランティア活動やイベントに関わる技術的なサポートやレクチャーを担う「オンラインボランティアサポーター」を養成するため日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との共催で講座を実施した。なお、当講座は本学学生のほかに「未来をひらく～私と 3.11 のこれまでとこれから～」実行委員会に参加していた他大学の学生にも参加を呼び掛けて行った。

日　時：2020 年８月 21 日（金）、９月９日（水）19:00-21:00　Zoom、Remo 開催
共　催：日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）
参加者：学生６名
「未来をひらく～私と 3.11 のこれまでとこれから～」実行委員会より
立正大学：学生２名、コーディネーター１名
桜美林大学：学生１名
埼玉県防災学習センター：職員２名　　計 12 名
講　師：島袋孝菜さん（一般社団法人おうえんフェス）
内　容：１日目・Zoom での会議やイベントの開設方法や諸注意
・Remo 体験
２日目・ワールドカフェ「Remo や Zoom を使ってやってみたいこと」
・企画のブラッシュアップと、企画実施時の利用ツールの検討



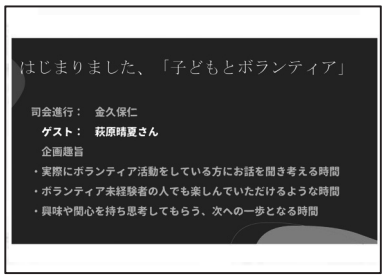
ⅲ）「はりねずみノたまご」立ち上げと活動支援

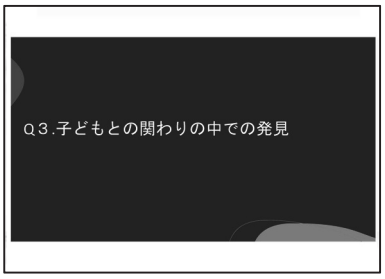
「将来子どもたちと関わろうと思っている学生たちに、子どもと関わるボランティアの魅力を伝える機会をつくりたい」という有志学生の相談を受け、グループの立ち上げ支援と、さらには、子どもと関わるボランティア活動を紹介するサロン企画の運営支援を行い、以下の活動が実施された。

①　「子どもとボランティア　第一回オンライン交流会」
日　時：2020 年７月３０日（木）12:20～12:50　Teams 開催
参加者：学生９名、教員３名
内　容：上尾市主催「あげお産業祭」や、認定 NPO 法人彩の子ネットワーク主催「こども☆夢☆未来フェスティバル」などであそびを企画してブース出展を行っている Heart&Smile 代表の学生をゲストに迎え、活動や子どもとの関わりについて司会

による質問形式で紹介を行ったあと、質疑応答の時間を持った。

② 「子どもとボランティア　第二回オンライン交流会」
日　時：2020 年 12 月 23 日(水)　Teams 開催
参加者：学生５名、教員２名
内　容：聖学院大学ボランティア・アソシエーション GRACE の元代表をゲストに迎え、認定 NPO 法人彩の子ネットワークが運営する子育て支援施設「上尾市つどいの広場あそぼうよ」での活動や子どもとの関わりについて司会による質問形式で紹介を行ったあと、質疑応答の時間を持った。





ⅳ）「あそび場オンラインプロジェクト」立ち上げと活動支援

2020 年４月より、新型コロナウイルス感染症拡大を受け、すべてのボランティア団体が活動中止を余儀なくされていたが、６ 月に社会福祉法人鶴ヶ島市社会福祉協議会より、「今年は対面でのボランティアがしばらくできないため、オンラインプログラムを一緒に考えてほしい。学生ボランティアの受入れができていない保育園などと繋ぎたい」と打診があった。そこで、企画の段階から学生に関わってもらうべく、昨年まで地域のイベントでこども遊びコーナーを運営していたボランティア団体の学生はじめ、こどもたちと遊ぶことに関心のある学生たちに声掛けを行い、活動実施に向けた支援を通じて団体が立ち上がり、以下の活動が実施された。

① 「笹久保さくら保育園×聖学院大学　第一回オンライン交流会」

社会福祉法人鶴ヶ島市社会福祉協議会の紹介で社会福祉法人白桜会笹久保さくら保育園とのオンライン交流会を実施した。

日　時：2020 年８月 24 日（月）10:00～10:30
　　Zoom 開催
連携先：社会福祉法人鶴ヶ島市社会福祉協議会、
　　社会福祉法人白桜会笹久保さくら保育園
参加者：学生７名、園児 21 名
内　容：物あてクイズ、宝探し、みんなで踊ろう、手作りメダルの配布
会議日程：６月 25 日（木）、７月９日（木）、10 日（金）、13 日（月）、８月３日（月）、
　　17 日（月）　計６回

保育園との事前打ち合わせ：８月４日（火）
リハーサル：８月 18 日（火）
振り返り：８月 24 日（月）

②　「手遊び歌世界一周♪」

日頃からボランティア活動等でつながりのある認定 NPO 法人彩の子ネットワークよりオンライン活動の打診があり、「上尾市つどいの広場あそぼうよ」に通う乳幼児親子とオンラインで交流を行った。

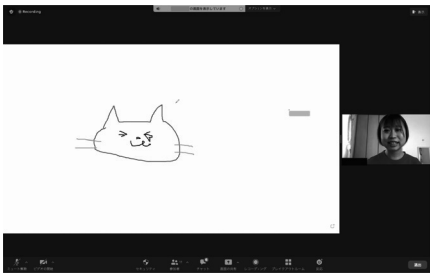
日　時：2020 年８月 25 日（火）11:00～11:30
　　Zoom 開催
連携先：上尾市つどいの広場あそぼうよ（運営：認定 NPO 法人彩の子ネットワーク）
参加者：学生６名、親子９組 21 名、あそぼうよスタッフ２名
内　容：みんなで自己紹介、手遊びうた（日本語、英語、中国語、ベトナム語）
会議日程：８月３日（月）、17 日（月）、24 日（月）　計３回
振り返り：８月 24 日（月）

③　「笹久保さくら保育園　第二回オンライン交流会」

８月に引き続きオンライン交流会を実施した。実施にあたっては、本学のオンライン活動に関する新聞記事を見た明治大学学生より問い合わせがあったことがきっかけとなり、その学生も合流して活動が行われた。

日　時：2020 年 11 月 20 日（金）10:00～11:00
　　Zoom 開催
連携先：社会福祉法人鶴ヶ島市社会福祉協議会、社会福祉法人白桜会笹久保さくら保育園
参加者：学生５名、明治大学学生１名、園児 21 名
内　容：じゃんけんパワーチャレンジ、工作、ダンス、質問タイムなど
会議日程：９月９日（水）、10 月 14 日（水）、 21 日（水）、28 日（水）、30 日（金）、
　　11 月４日（水）、19 日（木）、25 日（水）　計８回
振り返り：12 月９日（水）

④　「笹久保さくら保育園　第三回オンライン交流会」



日　時：2021 年２月 18 日（木）10:00～11:00
　　Zoom 開催
連携先：社会福祉法人鶴ヶ島市社会福祉協議会、
　　社会福祉法人白桜会笹久保さくら保育園
参加者：学生７名、園児 21 名

内　容：信号ゲーム、お絵かきクイズ、料理あてクイズ、ダンス、お話コーナーなど
会議日程：１月 20 日（水）、27 日（水）、30 日（土）、２月２日（火）、３日（水）、
　　11 日（木）、13 日（土）、16 日（火）、17 日（水）　計９回
振り返り：３月４日（木）

⑤　「笹久保さくら保育園　第四回オンライン交流会」

日　時：2021 年３月 25 日（木）10:00～11:00
　　Zoom 開催
連携先：社会福祉法人鶴ヶ島市社会福祉協議会、
　　社会福祉法人白桜会笹久保さくら保育園
参加者：学生６名、21 名
内　容：ひらがなクイズ、ダンス、お話コーナー、
　　卒園記念品の贈呈など
会議日程：２月 23 日（火）、３月４日（木）、10 日（水）、11 日（木）、16 日（火）、
　　18 日（木）、23 日（火）　計７回
振り返り：３月 31 日（水）

ｖ）「聖学院大学ボランティア・アソシエーション GRACE」オンライン活動支援

GRACE では、日頃大学とつながりのある福祉施設等での交流活動や大学のキリスト教行事への協力を行っているが、コロナ禍で従来の活動が出来なくなり、オンラインでの活動を検討したいとセンターへ相談があった。これを受けて、GRACE の学生がボランティア活動でお世話になっている認定 NPO 法人彩の子ネットワークにオンライン交流会の打診を行ったところ快く受け入れてくださり、活動が実現した。センターではオンライン活動の企画から実施にあたってサポートを行い、以下の活動が実施された。

①「クリスマス交流会 ～あわてんぼうのサンタクロース～」
日　時：2020 年 12 月 18 日（金）11:00～11:30　Zoom 開催

連携先：上尾市つどいの広場あそぼうよ（運営：認定 NPO 法人彩の子ネットワーク）
参加者：学生４名、親子７組 15 名、あそぼうよスタッフ２名
内　容：歌、仕掛け絵本の読み聞かせ、手品披露など

vi）「☘いろとりどり☘」立ち上げと活動支援

iv）の「聖学院大学ボランティア・アソシエーション GRACE」のオンライン活動に参加した新入生 2 名を中心に、認定 NPO 法人彩の子ネットワークとのオンライン活動を行う団体を発足することになり、センターで団体の立ち上げと、活動実施に向けた支援を行い、以下の活動が実施された。

①　「ZOOm バスツアーへようこそ♪」
日　時：2021 年２月 26 日（金）11:00～11:30　Zoom 開催
連携先：上尾市つどいの広場あそぼうよ（運営：認定 NPO 法人彩の子ネットワーク）
参加者：学生３名、親子９組 21 名、あそぼうよスタッフ３名
内　容：動物や海の生き物に関するクイズなど
会議日程：２月２日（火）、４日（木）、12 日（金）、19 日（金）、22 日（月）、25 日（木）
　　計６回
振り返り：２月 26 日（金）

②　「ZOOm バスツアーへようこそ♪」
日　時：2021 年３月２日（火）11:00～11:30
　　Zoom 開催
連携先：さいたま市子育て支援センター「みぬま」
　　（運営：認定NPO法人彩の子ネットワーク）
参加者：学生３名、親子９組 19 名、
　　みぬまスタッフ３名
内　容：動物や海の生き物に関するクイズ
会議日程：①の会議日程に含まれる
振り返り：３月２日（火）

③　「ZOOmバスツアーへようこそ♪」
実施日：2021 年３月 18 日(木)11:00～11:30　Zoom 開催
連携先：さいたま市子育て支援センター「みぬま」
　　（運営：認定 NPO 法人彩の子ネットワーク）
参加者：学生４名、親子２組５名、みぬまスタッフ４名
実施内容：動物や海の生き物に関するクイズなど

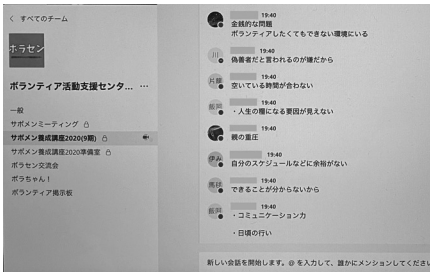
会議日程：３月 11 日（木）　計１回
振り返り：３月 18 日（木）

(2)学生サポートメンバー養成講座(9 期)の実施

学生と共につくる・育つセンターとして学生サポートメンバー（通称：サポメン！）の養成に力を入れている。サポメンは、ボランティアを実践している学生自身が、他の学生を巻き込み、ボランティアのきっかけをつくるとともに、学内外の学生ボランティアを盛り上げるための企画・運営を行う役割が期待されている。そのため、現役サポメンの協力も得て養成講座を実施し、サポメンとして必要となる考え方や基礎的な知識・技術を体験的に学び、終了後はサポメンとして活躍していけるよう支援している。同時に講座を通して、受講生同士・先輩サポメン・コーディネーター・他大学の学生との関係づくりも行っている。

今年度は、新型コロナウイルス感染症対応のためオンラインで実施した。

ⅰ)第1回「学生サポートメンバーの役割と可能性」



初回ということで、なぜサポメン養成講座を実施しているのかについてボランティア活動支援センタースタッフより説明し、さらに現在サポメンとして活動する先輩より活動の意義や魅力を紹介した。後半では、学生のボランティアの一歩を後押しする策を考え、発表を行った。

日　時：2020 年６月８日（月）18:15～20:00　Teams 開催
参加者：受講生８名、現サポメン５名　　計 13 名
内　容：・自己紹介
・ボランティア活動支援センターの役割　（願い・役割）
・学生サポートメンバーの役割と魅力
・ワーク①「ボランティアの一歩を踏み出せない理由」
・ワーク②「①の対応策を考える」

ⅱ)第2回「みんなでアイスブレイク 100 連発！？」

日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との共催で実施。オンラインアイスブレイクを実践、開発されている青木将幸さんを講師に招き、オンライン会議等で取り入れられているアイスブレイクについて学んだ。「アイスブレイクとは？」というレクチャーのあと、オンライン上で使えるアイスブレイクを参加者全員が実際に進行した。

日　時：2020 年 6 月 15 日（月）18:15～20:00
共　催：日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）
参加者：受講生 5 名、現サポメン 1 名　計 6 名
講　師：青木将幸さん（青木将幸ファシリテーター事務所主宰）
内　容：・レクチャー「アイスブレイクとは？」
　　・アイスブレイクの実践
　　・ふりかえり

ⅲ）第3回「学内外のボランティア活動を知る」

ボランティアをしたい学生を実際の活動につなげるには、学生が参加できるボランティア活動についての情報・理解が不可欠となる。そこで、受講生、現サポメンが所属するボランティアグループの活動についてプレゼンをし合い、聖学院生が取り組むボランティア活動への理解を深めた。
実施日：2020 年 6 月 22 日（月）18:15～20:00
参加者：受講生 7 名、現サポメン 3 名　計 10 名
内　容：受講生、現役サポメン！による活動紹介と質疑応答

ⅱ）成果と課題

・初のオンライン開催という環境、さらには学生とのやりとりがメールや電話に限られるなか、どのくらい学生が集まるか不安であったが、8 名の学生が受講し、通常開催と引けを取らない内容となった。出席率も高く、オンラインでも活発な意見交換を行うことができた。
・今回オンラインでの講座を確立したことで、今後のオンライン活用の可能性を広げることができた。

（3）視野を広げるボランティア教養講座の実施

社会の課題と向き合うための教養講座を実施し、学生たちとともに社会の諸問題と向き合い、学ぶ機会を持った。

ⅰ）「コロナウイルスと私たち」オンラインワークショップ

身近な新型コロナウイルス感染症というテーマから、自分たちの社会やその課題について考える時間として、また、学生たちが抱く新型コロナウイルス感染症に関わる不安等の感情を言語化する機会とするとともに、他の参加者の想いや考えに触れ、視野を広く持つきっ

かけや、学生同士のつながりづくりの機会として、認定 NPO 法人開発教育協会（DEAR）発行教材「COVID-19 とわたしたち」を用いたワークショップを以下の通り実施した。

日　時：2020 年６月 17 日（水）10:40～12:10　Teams 開催

参加者：学生５名

教　材：認定 NPO 法人開発教育協会（DEAR）発行教材「COVID-19 とわたしたち」

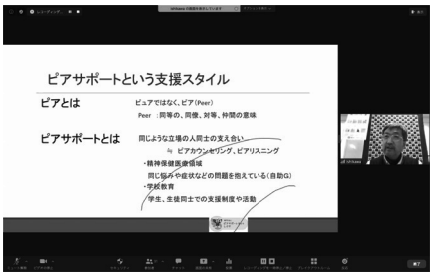
内　容：・参加者自己紹介

・アクティビティ１「わたしの気持ち」

・アクティビティ３「様々な意見を読んで考える」

・アクティビティ４「これからの世の中はどう変わる？」

ⅱ)「ピアサポート とは？ピアサポーターとは？」オンライン講話会



不登校・ひきこもりの方への理解や関わりのきっかけづくりとして、NPO 法人ピアサポートネットしぶやのスタッフや不登校・引きこもりの方々と関わりを持つピアサポーターをお招きして、日頃の不登校・ひきこもり支援に関する活動やコロナ禍での現状、大学生ボランティアへの期待などをお話頂く機会として以下の通りオンラインでの講話会を学生エンパワメント推進室協力のもと、実施した。

日　時：2020 年 12 月２日（水）10:40～12:30　Zoom 開催

協　力：学生エンパワメント推進室

参加者：学生 21 名、大学院生１名、教職員７名　計２９名

ゲスト：石川隆博さん（NPO 法人ピアサポートネットしぶや）

牧田鮎美さん（ピアサポーター／東京成徳大学大学院生）

渡辺輝人さん（ピアサポーター／獨協大学３年）

内　容：・講話「ピアサポートとは？ピアサポーターとは？」（石川さん）

・活動紹介、活動を通じて感じたこと気づいたこと（牧田さん、渡辺さん）

・意見交換

ⅲ)「シトラスリボンづくりワークショップ」オンデマンド配信

シトラスリボンプロジェクトは、「新型コロナウイルス感染症による誹謗中傷や差別をなくそう、『ただいま、おかえり』と言い合える優しいまちでありますように」という願いを込め、愛媛県内で生まれたプロジェクトで、埼玉県内でも取り組みが広がっている。学生がこの活動に協力するきっかけづくりとして、上尾市内でシトラスリボンの輪を広げている方々をお招きし、活動趣旨の説明の他、実際にリボンの作り方を教えていただく動画を収録し、学内限定でオンライン配信を行った。

配信日：2020 年 12 月７日（月）

ゲスト：市川富代子さん（あげおハートフルプロジェクト）
　　安藤由美さん（ハッピーアイランド）
内　容：・「シトラスリボンプロジェクト」について（市川さん）
　　・「シトラスリボン」のつくり方について（安藤さん）

(4)コロナ禍におけるボランティア活動機会の創出

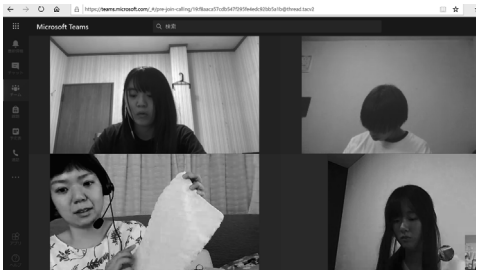
　新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、センターでは 2020 年３月以降、外部での対面活動の紹介を休止、さらには学内での集まりは対面授業週のみ条件つきで許可となり、学生のボランティア活動の機会が激減した。これを受けて、夏休み中に自宅からオンラインで参加できる活動として、マスク（自分用）とぞうきん（水害対策用）をつくりながら交流をする企画を以下の通り実施した。

ⅰ)ちくちくボランティア「マスクをつくる日。」

日　時：2020 年８月 12 日（水）10:40～12:40　Teams 開催
参加者：学生１名

ⅱ)ちくちくボランティア「ぞうきんをつくる日。」

日　時：2020 年８月 27 日（木）10:40～13:30　Teams 開催
参加者：学生７名



2. 学内の諸ボランティア活動の連絡、協力および支援に関する事業

(1)学生サポートメンバー(サポメン！)との連携

学生サポートメンバー（通称：サポメン！）は、聖学院大学におけるボランティアの活性化を目的として組織され、自分たちにできる活動を実施している。本年度は新型コロナウイルス感染症のため、従来の企画をオンライン化して活動を行った。

ｉ）ボラ Tea

サポメン！の「1 年生の孤立が心配」「団体の活動を途切れさせたくない」という声を受けて、聖学院生が活動している団体の活動を紹介し、さらには新入生同士や新入生と先輩のつながりづくりの場を設けることを目的として、10 月、11 月、２月の３回実施した。

① 「第 1 回新歓ボラ Tea」

新入生を主な対象として、聖学院生が活動しているボランティア団体の紹介と勧誘、さらには、コロナ禍で学生間の交流の機会が少ないことをうけて、グループに分かれて交流の機会を持った。

日　時　：2020 年 10 月 23 日（金）
　　昼の部 12:15～12:55　Zoom 開催
　　夕方の部 17:00～18:30　Zoom 開催

内　容：・聖学院生が関わっているボランティアグループの紹介
　　・グループに分かれて質疑応答や交流

参加団体：・学内団体
　　ボランティア・アソシエーション GRACE、手話同好会しゅわっち
　　復興支援ボランティアチーム SAVE、防犯ボランティアチーム STOP!
　　あそび場オンラインプロジェクト、Heart＆Smile

参加者：学生 12 人（サポメン！、団体所属学生：７人、参加学生：５人）

② 「第２回新歓ボラ Tea@Remo」

気軽に少人数のグループで話し合いができるオンライン会議システム Remo を活用し、新入生を主な対象として、前半は聖学院生が活動しているボランティア団体の紹介と勧誘、後半は趣味や関心事が近い学生で集まり、交流の時間を持った。

日　時：2020 年 11 月 18 日（水）11:00～13:00　Remo 開催

内　容：・聖学院生が関わっているボランティアグループの紹介

・趣味や関心が近い学生同士で集まりフリートーク

参加団体：・学内団体

ボランティア・アソシエーション GRACE、手話同好会しゅわっち

復興支援ボランティアチーム SAVE、防犯ボランティアチーム STOP!

あそび場オンラインプロジェクト、Heart＆Smile

参加者：学生 17 名（サポメン！、団体所属学生：９名、参加学生：８名）

③ 「第３回新歓ボラ Tea@Remo」

11 月に実施した、「第 2 回新歓ボラ Tea@Remo」実施以降も「交流の場の継続」の希望があったことや、「オンラインボラセン」（4 章参照）に参加した 1 年生から「同学年と友達になる機会がほしい」と相談があったことを受けて、春期休暇開始のタイミングで交流をメインに活動紹介の場を企画した。

日　時：2021 年２月５日（金）11:15～13:00　Remo 開催

内　容：・聖学院生が関わっているボランティアグループの紹介

・趣味や関心が近い学生同士で集まりフリートーク

参加団体：・学内団体

ボランティア・アソシエーション GRACE、手話同好会しゅわっち

♧いろとりどり♧

参加者：学生 11 名（サポメン！、団体所属学生：７名、参加学生：４名）

ⅱ）サポメン！ミーティング

授業期間中の毎週 1 回昼休み、企画に応じて随時オンラインでミーティングを行った。

ⅲ）成果と課題

・「新歓ボラ Tea」について、大学のポータルサイトやネット上のセンター専用の掲示板、LINE@で告知するほか、ボランティア関連の授業でサポメン！が複数回の呼びかけを行

ったにも関わらず、新入生の参加は少数に留まった。対面開催の場合は友人同士が誘いあって参加ができるものの、オンライン実施の場合、個人単位で参加することになるため、ハードルが高いと思われる。

・第２回、第３回の Remo で実施した「新歓ボラ Tea」は、サポメン！の「完璧でなくても、会議アプリ Remo を活用した新しい試みに挑戦したい」という声がきっかけとなって実現した。コロナ禍で活動が思うようにできない中でも、サポメン！たちは意欲的にイベント企画に取り組み、「ボランティア活動の紹介以外に、趣味のおしゃべりなどの時間を設け、参加しやすいイベントにしたい」という提案で実施してみたところ参加者にとても好評であった。

(2)ほたる祭りの実施

大学周辺には 1960 年代までは近隣にホタルが生息していたものの、環境の変化で絶滅の危機に瀕した。そこで、ホタルを再生させる取り組みを 2003 年からスタートさせ、翌年 2004 年にホタルが集うための水辺「ホタルのビオトープ ～ひかりのせせらぎ～」を大学内に完成させた。ホタルの飛翔を地域の方とともに楽しむ企画として、学生と教員が連携して、2004 年より鑑賞会「ほたる祭り」を毎年実施し、近隣地域の方々に好評を得ている。

ボランティア活動支援センターでは、「ほたる祭り」の企画・運営に取り組む学生実行委員の活動支援を行っている。

今年度 2020 年 6 月 13 日（土）に予定していた第 17 回 ほたる祭りは新型コロナウイルス感染症のため中止となった。

(3)授業等への協力

教員よりボランティア活動支援センターの紹介やコーディネーターの職能等に関する講義の依頼を受けて、次の授業にコーディネーターの派遣を行った。

日にち	授業名	対象学生	担当教員	講義内容
6 月 11 日(木)	釜石学	全学	渡邉正人教授	東日本大震災とボランティア活動－本学も含めて
6 月 18 日(木)				釜石市における復興支援ボランティア活動
7 月 2 日(木)				震災とボランティア－阪神淡路大震災から東日本大震災を巡って

10月16日（金）	専門演習Ⅰ（生活支援論）	心理福祉学科	小沼聖治助教	センターの紹介とコロナ禍におけるボランティア活動について
１１月１９日（木）	ボランティア概論／ボランティア論	政治経済学科 心理福祉学科 こども心理学科	川田虎男講師	ボランティアコーディネーターの役割
2021年 1月22日(金)	社会福祉援助技術演習Ａ	社会福祉士を目指す２年生	猪瀬桂二准教授	ボランティア活動を行うにあたって

(4)ボランティア・まちづくり活動助成事業の実施

ⅰ)実施概要

活発にボランティア活動に取り組む学生が一人でも増えること、助成金申請を通して自分たちの「伝える力=プレゼン力や事業計画づくり」を磨くとともに、地域の方々や先輩・教職員等多くの人が応援していることを実感すること、さらに、地域の方々に学生の取り組みについて知っていただくことなどを目的として本事業を実施している。また本事業はボランティアグループに限らず、教育活動の一環として地域貢献にかかわるゼミについても本助成金の活用が広がるよう支援している。実施にあたっては本学同窓会に共催してもらい、学生たちへの助成金25万円の支援をいただいた。

今年度は新型コロナウイルス感染症のため、また、公開審査会の際に来場者が任意で学生を直接応援できる「ドネーションパーティー」については中止し、審査員のオンライン面談と書類による審査を行った。

ⅱ)実施内容

①実施スケジュール

日にち	実施内容
6月29日（月）、30日（火）	オンライン説明会兼研修会 応募を予定している学生グループを対象に応募概要の説明を行った。
7月1日（水）～17日（金）	オンライン個別相談 申請書の書き方、申請内容、オンライン面談に向けての準備等のサポートを行った。
7月13日（月）、15日（水）	Zoom練習会 Zoomの操作方法や発表についてのレクチャーを行ったあと、操作練習の時間を持った。
7月18日（土）	オンライン面談 申請団体のプレゼンテーションと書類をもとに、同窓会からの助

	成金について審査員が審査し、ポイント数によって助成金の交付、未交付と助成額を決定した。
10月9日（金）	助成金交付説明会 助成金の使用用途や報告書類の記入方法について説明を行った。
12月9日（水）、 10日（木）	ボランティア・まちづくり活動助成事業報告会団体説明会 対面開催を予定していた報告会がオンライン開催となったことを受け、開催方法について説明を行った。
2021年 1月8日（金）	オンライン活動報告会 助成金交付団体による活動報告会を実施し、審査員が参加した。審査員には各活動について講評をいただき、後日、交付団体へのフィードバックを行った。

②審査員

NO	選出枠	肩書	氏名（敬称略）
1	大学同窓会	会長	秋谷大輔
2	ボランティア応援卒業生	株式会社 LITALICO 放課後等デイサービス指導員	菅野雄大
3	地域の方	上尾市ボランティア連絡会会長	本城文夫
4	地域の方	さいたま北商工協同組合副理事長	新井一年
5	専門家（NPO 関係）	NPO 街のひろば理事長	松浦康介
6	専門家（ボランティア関係）	社会福祉法人上尾市社会福祉協議会 上尾市ボランティアセンター	岡田淳一
7	大　学	ボランティア活動支援センター所長	若原幸範
8	大　学	地域連携・教育センター所長	渡邉正人

③申請内容と助成額

NO	団体名	所属数	事業名	申請額	決定額
1	パワフルキッズ	9人	ミラコバト	21,000円	21,000円
2	聖学院大学復興支援ボランティアチーム SAVE	38人	一期一会のちながりと震災の学びの継続をオンラインで	24,000円	24,000円
3	みつけたかおのものがたり ～どこでもえほんプロジェクト～	15人	みちかからみらいへ	50,000円	48,500円
4	未来をひらく 2021	5人	今、私たちが出来ること	50,000円	50,000円
5	学生ボランティア団体 STEP.	22人	若い力で東北を笑顔に！	50,000円	48,500円
6	あそび場オンラインプロジェクト	5人	あそび場オンライン プロジェクト	50,000円	29,000円
7	釜石〇〇プロジェクト	5人	釜石〇〇プロジェクト	50,000円	29,000円
8	若者の就労支援ネットワーク ムーミンの会	5人	若者が若者のために作る居場所	16,000円	0円
					合計 250,000円

ⅲ）助成金を受けた主な団体の活動実績

①復興支援ボランティアチーム SAVE

助成額：24,000 円

今年は初めての試みとして、「復興支援“オンライン”スタディーツアー」を実施した。

地図検索機能を用いた釜石市の名所案内や、動画によるお土産紹介、さらに、地元の方々とオンラインで繋がり、お話を聴かせていただいた。

②あそび場オンラインプロジェクト

助成額：29,000 円

コロナ禍で遊ぶ機会が減少している子ども達のために、オンラインを活用して新しい形の遊びを提供しようと、今年新たに立ち上がった団体。鶴ヶ島市社会福祉協議会と連携し、保育園と４回、子育て支援センターと１回、リアルタイムでのオンライン交流会を実施した。

③みつけたかおのものがたり

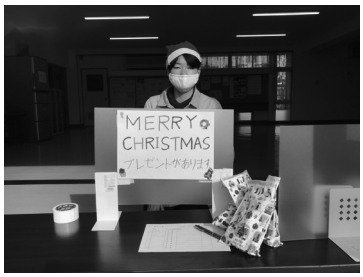
～どこでもえほんプロジェクト～

（児童学科造形教育論　柴﨑ゼミ）

助成額：48,500 円

造形教育論のゼミで制作しているパワーポイントを活用したオリジナル絵本を用いて、保育園２か所と、子育てイベント（オンライン開催）へ参加し、学生達の作品を通したクイズや読み聞かせなどを行い、子ども達と交流を図った。

④パワフルキッズ



（子ども心理学科発達心理論　金谷ゼミ）

助成額：21,000　円

一般社団法人　すくすく広場と埼玉県住宅課と連携し、団地に住んでいる子ども達を対象にハロウィンイベントとクリスマスイベントを実施した。感染対策をとりつつ、外遊びやお菓子の配布などを行った。

ⅳ）助成事業に関わった方々の声

①申請団体の声

・卒業後も聖学院大学に携わり、支援してくださることに感謝致します。皆様方のおかげで聖学院大学のボランティア活動はどんどん発展しているのだと考えております。本当にありがとうございます。

・コロナ禍にありながら助成金事業を柔軟に進めていただき本当にありがとうございます。この事業があったおかげでたくさんの人に関わることができる活動になっていったと思います。また報告会等でいただいた言葉も大切に今後も精力的に活動していきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

・ありがとうございました。無事にプログラムを成功させることができました。来年度以降の後輩達の活動が助成金を利用することにより、もっと盛んになって欲しいと思っています。

②審査員の声

・コロナ禍の難しいなかで、非常に意欲的な取り組みだったと思います。今後のボランティア活動のモデルとなる可能性も持っていると思います。活動するなかでは難しさもあったと思いますが、オンラインならではの良さもあったのではないかと思います。そうした点も踏まえて、今後につなげていただければと思います。期待しています。

・今回はうまくできなかった、という経験が次の改善点に生きてくるので、全く気にする必要はないと思います！気を抜く、無理しない、ヘルプを出せるというのも、活動の上で大事なことだと僕は思っています。

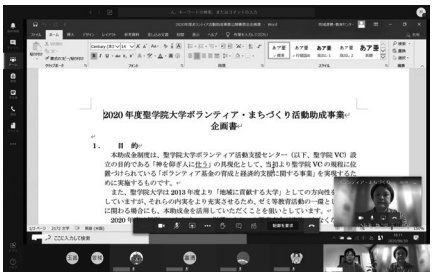
・震災の風化を防ぐ為にも活動は必要な事で、その中でも他大学との交流があるのは広く知ってもらうためにはメリットですので、そのメリットを最大限生かして活動を行って頂ければと思います。

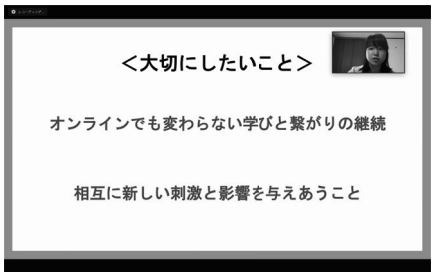
ⅴ）成果と課題

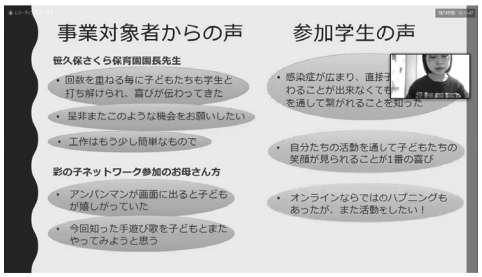
・今年は、コロナウイルス感染拡大の影響が大きく、予定通り活動が実施できなかった団体もあったが、オンラインでの活動を模索し、展開できた団体にとっては新たなるチャレンジの一年となった。

・大学に集って審査会を実施することが難しかったため、オンライン面談とオンライン報告会という新しい方法で実施した。進行上は大きなトラブルもなく、時間通りに開催することができた。

・審査員によっては、オンライン化したことで参加しにくい方もいらっしゃったため、今後は感染対策を徹底しつつ、開催方法については柔軟に対応していく必要を感じた。







(5)聖学院大学復興支援ボランティア交通費補助金

ⅰ)実施概要

東日本大震災の被災地における復興支援ボランティア活動に取り組む本学の学生に対して交通費の補助を行っている。

ⅱ)補助の概要

・１年間に２回まで東日本大震災をはじめとした自然災害に関わるボランティア活動の交通費について、往復の場合は 15,000 円、片道の場合は 7,500 円を上限に補助を行う。
・補助に当たっては、事前に申請を行い、センター運営委員会にて決定する。
・補助を受ける者は、「活動証明書」「領収書」「活動レポート」の提出が求められる。

ⅲ)実　績

今年度は新型コロナウイルス感染症のため、交通費補助を活用した現地でのボランティア活動は中止となった。そのため申請も０件であった。

3. 復興支援ボランティア事業

(1)東日本大震災復興支援ボランティアスタディツアーの実施

2011 年８月より、本学ではボランティアスタディツアーを実施している。今年度は、新型コロナウイルス感染症のため、例年春に実施していた「桜プロジェクト」、夏の「よいさっ！プロジェクト」、冬の「サンタプロジェクト」は中止となったが、これに変わる企画として夏の時期に「復興支援“オンライン”スタディーツアー」を実施。また、実施にあたっては、学内のボランティア団体復興支援ボランティアチーム【SAVE】と協働で取り組んだ。

なお、本学が活動を行っている釜石市とは、2014 年１月に連携協定を締結している。

ｉ)復興支援“オンライン”スタディーツアー

本学が活動を行っている岩手県釜石市の震災当日の様子や見どころを、【SAVE】が地図アプリや映像、クイズを交えて紹介したほか、日頃活動でお世話になっている現地の方々とオンラインでつながり、震災から現在までの歩みをお話しいただいた。

① ツアーの実施

・日　時：2020 年８月２９日（土）10:00～15:30、３０日（日）13:30～15:30
　　Zoom 開催

・参加者：学生 17 名、教職員 14 名　計 31 名

・内　容：

―震災学習と復興支援ボランティアチーム【SAVE】の学生による釜石見どころ紹介

―浜辺の料理宿宝来館女将 岩崎昭子さんのお話

震災当時津波で大きな被害を受けながらも、一時のあいだ宿を開放し近隣住民の方の避難所運営にあたり、宿の復旧後は釜石の復興のみならずラグビーワールドカップの誘致活動やワイン造りなどアイデア豊かに動かれてきた岩崎女将に震災からこれまでの歩みと今後の展望をお話いただいた。

―高橋和義牧師による礼拝とお話

震災直後、関東から釜石に移住され、仮設住宅の集会所などで交流活動に取り組まれ、現在は釜石市社会福祉協議会において、生活支援コーディネーターとして市民ひとりひとりの想いに寄り添われている高橋牧師にこれまでの歩みと大学生にできる支援についてお話を伺った。そして高橋牧師とともに祈りの時を持った。

―参加者間での振り返り

この２日間のツアーに参加して感じたことや考えたこと、自分たちにできることは何

か、といったテーマで参加間による意見交流を行った。

ⅱ）成果と課題

- 新型コロナウイルスの影響があり、これまで継続的に訪れていた釜石への訪問が叶わず、学生たちもオンライン授業中心で大学に来ることも困難な状況が続いている。そのような中でも、オンラインを駆使して被災地のことを学び、現地の方とつながる機会を持つことができたことは大きな成果であった。
- オンラインならではの試みとして、現地の地図を見ながらの震災遺構と観光ガイド、事前収録によるお土産品の紹介、現地とオンラインでつないだリアルタイム講演会等、多くのチャレンジができたことも学生たちの「現地の状況や魅力を少しでも伝えたい」という思いの表れであった。
- 同時にオンライン活動の難しさとして、現地の方との交流や参加者同士の交流を図ることが困難であり、結果的にツアーのたびにＳＡＶＥに新規メンバーが加わっていたが、今回のツアー後に加入したメンバーは０名だった。そのことは、団体の運営継続にも大きな影響を与えることとなった。
- 新型コロナウイルスさえ収束すれば、再び現地への訪問が可能になると考えられるが、それまでの間オンラインでの活動は現地とのつながりを持ち続けるためにも重要な活動になると考えられる。

（２）釜石「キッズかけっこ教室」の実施

本学では 2018 年度より、社会福祉法人愛泉会かまいしこども園の園児を対象とした「キッズかけっこ教室」を陸上競技部とボランティア活動支援センターの共催により実施している。今年度は新型コロナウイルス感染症のため中止となった。

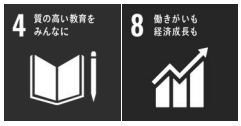
(3)釜石の高校生×聖学院生による釜石〇〇プロジェクトの実施

このプロジェクトは、被災地支援・インターンシップの一環として、釜石の高校生と受講生の学生が、釜石のまちを盛り上げるプロジェクトの企画を立て、その実現については、ボランティア活動として位置付け活動を展開している。今年度は新型コロナウイルス感染症のため中止となった。

(4)「マイ・タイムラインを作ろう」の実施

防災・減災に関心を持つきっかけづくりとして、国土交通省が発行している「マイ・タイムライン」を作成するワークショップを実施した。

日　時：2020 年 10 月９日（金）17:00～18:00
　　ハイブリッド開催
参加者：学生６名
進　行：丸山阿子（ボランティアコーディネーター）
内　容：・災害への備えに関するミニ講義
　　・「マイ・タイムライン」の作成、発表



(5)「被災地と共に歩む
～聖学院大学卒業生による復興支援員活動報告会～」の実施

2018 年度に釜石リージョナルコーディネーター（通称：釜援隊）に就任し、任期満了（2021 年３月）まで務めた本学卒業生より、3 年間の歩みと被災地の変化やこれからについてお話を伺った。実施にあたっては、復興支援ボランティアチーム【SAVE】と連携し、前代表、前副代表が司会を務めた。

日　時：2021 年１月 20 日（水）10:40～12:10　Teams 開催
参加者：学生 10 名、教職員 10 名　計 20 名
ゲスト：由木加奈子さん（釜石リージョナルコーディネーター、こども心理学科卒業生）
内　容：・由木さんによる活動報告
　　・質疑応答

(6)震災復興シンポジウム「聖学院大学と被災地の歩み～東日本大震災から 10 年を覚えて～」の実施

この 10 年間大学として被災地とどのように歩んできたか、またこれからどう歩んでいくのか考える機会として、これまで大学で復興支援活動に関わってきた卒業生、在学生、教職員が登壇するシンポジウムを実施した。※詳細は特別編集 p.6～参照

日　時：2021 年３月７日（日）13:30～16:30　YouTube ライブ配信

参加者：約 100 名

内　容：・開会挨拶　清水正之（学長・理事長）

・シンポジウムⅠ「聖学院大学と被災地との歩み」

進行：平修久（副学長）

パネリスト：蛭間龍矢（コミュニティ政策学科 2011 年度卒）

山口雄大（人間福祉学科 2013 年度卒）

菅野雄大（こども心理学科 2018 年度卒）

・釜石からのメッセージ　市川淳子（釜石市鵜住居地区主任児童委員）

・シンポジウムⅡ「今、そしてこれから」

進行：若原幸範ボランティア活動支援センター所長

パネリスト：玉之内菖（心理福祉学科 ３ 年　復興支援ボランティアチーム【SAVE】代表）

山下佑太（心理福祉学科 ３ 年　復興支援ボランティアチーム【SAVE】副代表）

・閉会挨拶　渡邉正人（地域連携・教育センター所長）

主　催：聖学院大学、ボランティア活動支援センター、地域連携・教育センター

(7)「3.11　あの日から 10 年　～未来への祈り～」の配信

センターでは、キリスト教センターと連携し、東日本大震災で亡くなった方々、また現在も復興に向けて努力されている皆様を覚え、毎年、震災発生の日に、大学チャペルにおいて礼拝の時を持つと同時に、これからを共にどの様に歩んでいくかを考えるイベントを継続的に実施している。今年度は、新型コロナウイルス感染症のため、礼拝と学生、教員の報告をキリスト教センターFacebook 上で配信した。

配信日時：2021 年3月 11 日（木）14:46～

聖学院キリスト教センターFacebook にてオンデマンド配信

内　容：・キリスト教センター所長による礼拝

・学生代表による復興支援活動報告

・ボランティア活動支援センター所長による震災復興シンポジウム報告

(8)関連機関との連携

ｉ)「未来をひらく～私と 3.11 のこれまでとこれから～」実行委員会への協力

2019 年２月に、埼玉県防災学習センターとの共催で４大学の学生実行委員によるボランティアサミット「未来をひらく～3.11 から～」に当時実行委員として企画に参加していた現３、４年生が中心となり、震災 10 年という節目を迎える中、２回目となるボランティアサミットが実施した。本センターは、埼玉県防災学習センターと連携し、実行委員の呼びかけや、情報提供、ミーティング時のファシリテーションなどのノウハウ協力を行った。

実行委員会には、桜美林大学、十文字学園女子大学、ものつくり大学、立正大学、聖学院大学の学生が参加した。

①実施体制

・主催：埼玉県防災学習センター
・共催：未来をひらく～私と 3.11 のこれまでとこれから～実行委員会
　　聖学院大学ボランティア活動支援センター
・協力：立正大学社会福祉学部ボランティア活動推進センター
　　一般社団法人 SmartSupplyVision、いのちをつなぐ未来館
・「未来をひらく～私と 3.11 のこれまでとこれから～」実行委員会構成団体
　桜美林大学学生個人ボランティア/立正大学熊谷キャンパス学生個人ボランティア/
　聖学院大学 STEP./聖学院大学復興支援ボランティアチーム【SAVE】/
　ものつくり大学今井研究室／十文字学園女子大学個人ボランティア／
　埼玉県防災学習センター/立正大学社会福祉学部ボランティア活動推進センター/
　聖学院大学ボランティア活動支援センター

②活動スケジュール

日にち	活動内容	場所
2020 年 ７月６日（月）	第１回実行委員会	オンライン
８月 19 日（水）	第２回実行委員会	
９月 16 日（水）	第３回実行委員会	
10 月 21 日（水）	第４回実行委員会	
11 月 18 日（水）	第５回実行委員会	
12 月 16 日（水）	第６回実行委員会	
2021 年 １月 20 日（水）	第７回実行委員会	
２月 17 日（水）	第８回実行委員会	

２月 17 日（水） ２月 25 日（木）	公開オンライン記者会見	
２月 27 日(土)	前日準備	
２月 28 日(日) ３月１日(月)	ボランティアサミット「未来をひらく ～私と 3.11 のこれまでとこれから～」	
３月 25 日(木)	実行委員会振り返り	

③当日の概要

・日時：１日目　2021 年２月 28 日（日）10:00～16:00　Zoom 開催
　　２日目　　３月１日（月）17:00～18:30 Zoom 開催

・参加人数：約 160 名

・当日のスケジュール

１日目　10:00～11:00　講演会
　　講師：佐藤敏郎（小さな命の意味を考える会）
　　菊池のどか（いのちをつなぐ未来館）
　　11:00～12:00　未来をひらく座談会
　　パネリスト：玉之内菖（聖学院大学３年）
　　梶風希（立正大学２年）
　　佐藤敏郎、菊池のどか
　　進行：松本一帆（聖学院大学４年）
　　13:00～14:30　グループワークショップ『震災から学び「未来をひらく」』
　　14:40～16:00　懇親会（グループワーク参加者のみ）
２日目　17:00～18:30　防災講座

・プログラム内容

プログラム１）講演会

ボランティアサミットのタイトル「未来をひらく～私と 3.11 のこれまでとこれから～」の名前は、震災で多くの犠牲が出た大川小学校で娘さんを津波で亡くされた佐藤敏郎さんのお話に由来している。【大川小の校歌の題は「未来をひらく」です。ここは悲しいことが起きた場所ですが、何かのきっかけに「未来をひらく」場所になればいいと思います。】

講演会では、佐藤敏郎さんに大川小学校をオンラインでご案内いただいた後、佐藤さんと岩手県釜石市の震災伝承施設「命をつなぐ未来館」の菊池のどかさんに、お二人の震災以降のこれまでの歩みや、学生たちにできることをテーマにお話いただいた。

プログラム２）未来をひらく座談会

東日本大震災や自然災害の復興支援に関わった経験のある学生２名が登壇し、小学生だった震災当時の記憶から現在の活動に至るまでの歩みについて発表。後半は、座談会形

式で佐藤さん、菊池さんを交えて、活動するうえでの悩みや葛藤を共有しながら、「どのような未来をひらいていきたいか」というテーマで語り合った。

プログラム３）グループワークショップ『震災から学び「未来をひらく」』

　グループに分かれ、講演会、座談会の内容を共有し、参加者それぞれの 10 年の歩みを振り返った後に、「これまでの関わりや学びを通して自分たちはどのような未来をひらいていくのか」というテーマで意見交換の時間を持った。

プログラム４）懇親会

　親睦を目的に、トークテーマを設けて、参加者、実行委員間で交流の時間を持った。

プログラム５）防災講座

　ハザードマップや街の危険個所のチェック、防災食の準備についてクイズを交えながら紹介を行った。

4. 学外のボランティア活動の紹介とその活動の支援に関する事業

(1)ボランティアコーディネート業務

新型コロナウイルス感染症のため、従来大学１号館地下１階“地域共生広場 1cafe”の相談窓口にて行ってきた相談対応を休止。対面での相談は事前予約制とし、電話、メール、オンライン（Teams）をメインにボランティアを希望する学生、ボランティアに関連した教職員の相談対応を行った。コロナ禍で取り組める活動の紹介や、オンラインを活用したボランティア活動への参加を希望する学生と学内のボランティア団体とのマッチング、活動のオンライン化のフォローなど、多岐にわたる相談に応じた。

また、学生ボランティアを募集したい近隣諸団体のボランティア担当者からの相談については、大学の状況を伝えつつ対応し、学生にはオンライン等、自宅でできる活動をピックアップして紹介やマッチングを行った。

ⅰ)「★オンラインボラセン★」の開設

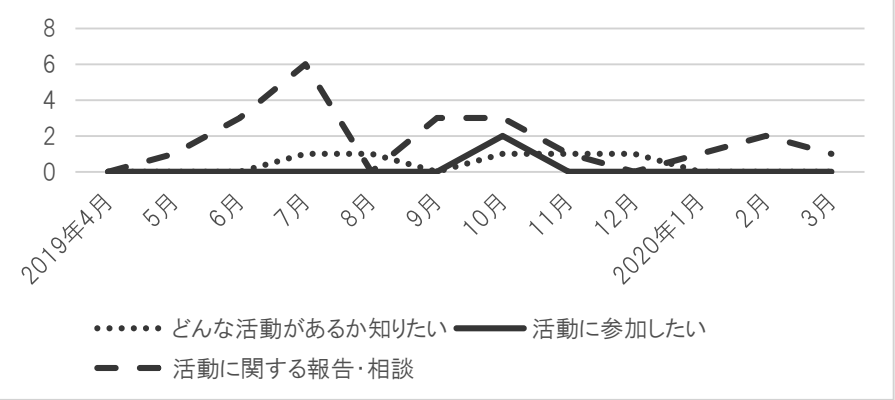
対面授業週を除く授業期間中に、ボランティア活動に興味・関心のある学生が、ボランティアコーディネーター、学生サポートメンバー、ボランティア活動に取り組む学生たちとオンライン上で気軽に活動の相談などやり取りできる場を開設した。

開設日時：2020 年 10 月７日（水）、14 日（水）、21 日（水）、28 日（水）
11 月 13 日（金）、20 日（金）、27 日（金）、12 月４日（金）、18 日（金）
2021 年１月８日（金）、15 日（金）　計 11 回
いずれも 12:10～12:55

参加者　：学生のべ 48 名

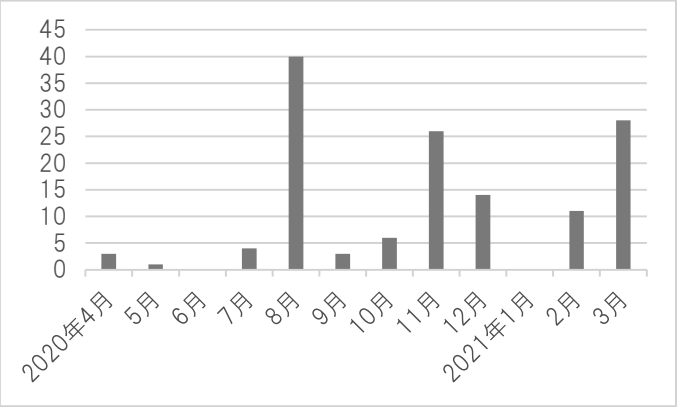
ⅲ)個人ボランティア相談件数と相談内容

相談件数　36 件内訳



ⅱ）新規ボランティアマッチング件数と活動内容

① 月別マッチング者数　のべマッチング件数 136 件内訳



② 主なマッチング先

月	マッチング先
2020 年４月	県内：NPO 法人ハンズオン埼玉
５月	県内：NPO 法人ハンズオン埼玉
７月	県内：「未来をひらく～私と 3.11 のこれまでとこれから～」実行委員会
８月	センター主催：復興支援”オンライン“スタディツアー、 ちくちくボランティア 県内：社会福祉法人白桜会笹久保さくら保育園、 認定 NPO 法人彩の子ネットワーク
９月	全国：日本財団学生ボランティアセンター
10 月	センター主催：マイ・タイムラインをつくろう
11 月	センター協力：新聞紙ごみ箱づくりワークショップ 県内：社会福祉法人白桜会笹久保さくら保育園、 社会福祉法人きずなの会きずなの里
12 月	県内：社会福祉法人愛宕会あたご保育園、 認定 NPO 法人彩の子ネットワーク
2021 年２月	県内：社会福祉法人白桜会笹久保さくら保育園、 認定 NPO 法人彩の子ネットワーク 県外：敬愛大学「震災満 10 年を考える講演会」（ゲスト登壇）
３月	センター協力：みつろうラップづくりワークショップ 県内：社会福祉法人白桜会笹久保さくら保育園、 認定 NPO 法人彩の子ネットワーク、こども☆夢☆未来フェスティバル 県外：社会福祉法人東京聴覚障害者福祉事業協会たましろの郷

ご対応してくださった団体の皆様、大変お世話になりました。

(2)「ボラフェス！2020」の実施

本学の学園祭「ヴェリタス祭」にて、近隣や卒業生が働く福祉施設をお招きして手作り商品の販売や、ボランティア募集をしていただくなど、福祉施設と学生・教職員、地域の方々との接点をつくる機会として実行委員会形式で毎年イベントを実施している。今年度は新型コロナウイルス感染症のため、学園祭がオンライン配信となったことを受けて「ボラフェス！2020」は中止となった。

(3)地域イベントへの参画

上尾市やさいたま市等で行われるイベントについては、企画段階から関わることが増えてきている。学生も担い手の一人としての自覚を持ち参加することで、学生と地域との顔の見える関係が育まれつつある。今年度はコロナ禍となり、地域のイベントも中止が相次いだうえ、センターではオンラインで参加できるイベントのマッチングのみ対応となったため、例年に比べて地域イベントへの参加の機会が激減した。

ｉ)地域イベントへの参加実績と参加内容

日にち	依頼元／イベント名	参加内容	参加人数
2021 年 ３月 21 日（日）	認定 NPO 法人彩の子ネットワーク／「こども☆夢☆未来フェスティバル」	オンラインでのレクリエーション、オリジナル絵本の読み聞かせ	８名

(4)学外団体からの相談対応

今年度は、新型コロナウイルス感染症のため、例年に比べて相談件数は減ったものの、オンラインでの活動や自宅で取り組める活動の相談をいただくなど、コロナ禍ながらも新たな活動を生み出す機会となった。

ｉ)学外団体相談対応件数　35 件内訳

月	来訪	ＴＥＬ	ＭＡＩＬ	その他
2020 年４月	―	1	3	―
５月	―	1	―	―
６月	―	5	2	―
７月	1	2	4	―
８月	―	1	―	―
９月	―	―	1	―
10 月	―	3	2	―

月	来訪	ＴＥＬ	ＭＡＩＬ	その他
11 月	1	1	―	1
12 月	―	1	―	1
2021 年 1 月	―	―	3	―
2 月	―	―	―	―
3 月	―	1	―	―
合計	2	16	15	2

(5)コーディネーターのスーパーバイズ

センター発足時から、コーディネーターの日々のボランティアコーディネーションについて、毎週１回（15～60 分程度）スーパービジョンを実施している。困難な調整事例や課題のある学生への対応方法など、コーディネーターが一人で抱え込まない環境づくりを行うことや、複数で課題を検討することで、様々なアイデアが生まれ、よりよい支援や活動につなげることを目的としている。

■スーパーバイズ：毎週 1 回 15～60 分

5. ボランティア活動の記録と広報に関する事業

(1)ボランティア情報の発信(メルマガ・LINE@・Teams・ホームページ・Facebook・掲示板)

ⅰ)ボランティア掲示板でのボランティア情報の紹介

大学１号館地下１階“地域共生広場 1cafe”に相談窓口とあわせて設置している「ボランティア掲示板」では、学内外のボランティア情報のポスターを掲示し、日頃から学生への周知を行っている。

ⅱ)Teams グループの開設

新型コロナウイルス感染症のため、大学に MicrosoftTeams を活用したオンライン授業が導入されたことを受け、センターも Teams グループを開設し、情報発信を開始した。

ⅲ)メールマガジン・LINE@・Teams での情報配信

センターでは、配信希望者に月１～３回程度、不定期で「おすすめボランティア情報」を配信している。今年度はメールマガジン、LINE@に加え、Teams グループでの配信を開始した。なお、メールマガジンについては、メール上での情報配信のニーズが少なくなったことを受けて 2021 年３月末をもって終了した。

・メールマガジン
　登録者数：294 名（2021 年３月現在)、配信数：12 通
・LINE@
　登録者数：276 名（2021 年３月現在)、配信数：21 通
・Teams グループ
　登録者数：74 名（2021 年３月現在)、配信数：36 通

(2)ボランティア活動支援センター広報活動

ⅰ)WEB 上での情報発信

センターの取り組みを外部へ発信することを目的として、ホームページを設置している。日々の活動については、Facebook ページで紹介している。

・Facebook ページ　フォロワー数：459 人（2021 年３月 31 日現在）

ⅱ)広報ツールの作成・更新

センターや事業の周知についてはポスター等を作成して行っている。

※製作物は資料編に掲載

ⅲ)「ボラセンオンラインツアー！」の実施

自宅からオンラインで授業を受ける学生に向けて、センターについて知ってもらうことを目的に大学正門からセンターへのアクセスや機能についてライブ中継での紹介を行った。

日時：2020年6月2日（火）12:30～13：00　Teams開催

参加者：学生３名

ⅳ)「ボランティア交流会」の実施

自宅からオンラインで授業を受ける学生に向けて、ボランティア活動に触れるきっかけづくりとして、コーディネーターとボランティアに取り組む学生のボランティア談をライブ配信した。

日時：2020 年６月 10 日（水）12:30～13：00　Teams 開催

参加者：学生５名

ⅴ)「ボラちゃん！」の配信

オンライン授業期間中の特別企画として、ボランティア活動に取り組む学生をゲストに招き、活動の魅力や学生の成長ストーリーを紹介する動画配信を行った。

配信日	配信内容	配信場所
５月 14 日（木）	「ボラちゃん！第１回」 コーディネーターの進行で、復興支援活動に取り組む学生に活動内容や活動の魅力、学校生活について質問形式で話を聞いている様子を配信した。	Teams グループ 大学公式 YouTube
５月 29 日（金）	「ボラちゃん！第２回」 コーディネーターの進行で、趣味のダンスを活かしてボランティア活動に取り組んだ学生に活動エピソードやこれまでのボランティア経験、学校生活について質問形式で話を聞いている様子を配信した。	Teams グループ 大学公式 YouTube
６月 12 日（金）	「ボラちゃん！第３回」 コーディネーターの進行で、学内外でボランティア活動に取り組む学生に活動内容や活動の魅力、将来のことなど質問形式で話を聞いている様子を配信した。	Teams グループ 大学公式 YouTube
６月 29 日（月）	「ボラちゃん！第４回」 コーディネーターの進行で、防犯パトロール活	Teams グループ 大学公式 YouTube

	動に取り組む学生に活動内容や活動の魅力、将来のことなど質問形式で話を聞いている様子を配信した。	
10月２日（金）	「ボラちゃん！第５回」 コーディネーターの進行で、勉強もボランティア活動も熱心に取り組む留学生にこれまでに参加したボランティア活動で印象に残っているエピソードや学生生活のことなど質問形式で話を聞いている様子を配信した。	Teams グループ 大学公式 YouTube
11月４日（水）	「ボラちゃん！第６回」 コーディネーターの進行で、不登校や引きこもり経験のある若者や子どもたちと関わっている学生に活動内容や活動の魅力、将来のことなど質問形式で話を聞いている様子を配信した。	Teams グループ 大学公式 YouTube
11 月 13 日（金）	「ボラちゃん！特別編①」 特別編として、ボランティアグループ「はりねずみノたまご」が７月に実施した「子どもとボランティア　第一回オンライン交流会」の短縮版を配信した。	Teams グループ 大学公式 YouTube
12 月 22 日（火）	「ボラちゃん！特別編②」 特別編として、８月に実施した復興支援”オンライン”スタディーツアーの際に好評であった、復興支援ボランティアチーム SAVE の学生による岩手県釜石市のお土産紹介動画を配信した。	Teams グループ

6. その他の事業

(1) 視察・研修記録

ⅰ)研修・勉強会参加実績

日にち	研修先・勉強会名等	参加人数
2020 年 8 月 24 日（金）	学生ボランティア支援者連絡会 主催：東京ボランティア・市民活動センター 会場：オンライン	コーディネーター2 名
10 月 30 日（金）	リフレクションを深めるメタファシリテーション手法の活用 主催：日本サービス・ラーニング・ネットワーク 会場：オンライン	コーディネーター1 名
11 月 28 日（土）	「SDGs de 地方創生ゲーム」公認ファシリテーター養成講座 主催：NPO 法人イシュープラスデザイン, 株式会社プロジェクトデザイン 会場：オンライン	コーディネーター1 名
2021 年 2 月 23 日（火）、 27 日（土）、 28 日（日）	市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会 主催：NPO 法人日本ボランティアコーディネーター協会 会場：オンライン	コーディネーター1 名

(2)視察対応・活動発表・講師対応・外部委員

ⅰ)視察対応

日にち	来訪団体名	来訪人数
2021 年 2 月 19 日（木）	へりぽーと（町田市）	オンラインにて対応
3 月 3 日（水）	社会デザイン教育研究会 社会デザイン教育の実践事例としてのボランティアセンターの取り組みについて	オンラインにて対応（4 名）

ⅱ)活動発表・講師対応

日にち	活動発表先
2020 年 7 月 14 日（火）	東京都立大学ボランティアセンター「ビジョンづくりワーキンググループ」学習会

	主催：東京都立大学ボランティアセンター 内容：大学ボランティアセンターの役割 講師：川田虎男
2020 年 8 月 24 日（月）	学生ボランティア支援者連絡会 主催：東京ボランティア・市民活動センター 内容：コロナ禍のボランティア活動の可能性と支援のあり方について話題提供 講師兼ファシリテーター：川田虎男
9 月 19 日（土）	NPO インターンシップラボシンポジウム 2020 主催：NPO インターンシップラボシンポジウム実行委員会 内容：分科会「学生が変わる!? 地域が変わる!?～NPO インターンシップ徹底解剖 2020 ～」進行 講師：川田虎男
11 月 7 日（土）	身近な生活の中に SDGs の目標を 主催：NPO 法人メイあさかセンター 内容：SDGs の解説とワークショップの進行 講師：芦澤弘子
11 月 19 日（木）	施設ボランティアコーディネーター情報交換会 ～ボランティアが呼べないこんな世の中だって～ 主催：いたばし総合ボランティアセンター 内容：施設での事例報告とコロナ禍への対応について 講師兼ファシリテーター：川田虎男
2021 年 2 月 1 日（月）	あげお社協だより　ふれふれ 165 号寄稿（資料集参照） 「コロナ禍におけるボランティア活動」 執筆：川田虎男

ⅲ）外部委員

氏名	所属委員会
川田虎男	・日本福祉教育・ボランティア学習学会特任理事 ・埼玉県社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター運営委員 ・上尾市社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員（委員長） ・さいたま市高齢者生活体制整備事業協議会委員（委員長） ・大学でのボランティア推進に関する調査ワーキングチームメンバー（事務局：東京ボランティア・市民活動センター）
芦澤弘子	・NPO インターンシップラボシンポジウム実行委員 ・市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2021 準備会委員

	（事務局：東京ボランティア・市民活動センター） ・市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2021 実行委員 ・横浜アクションアワード一次審査会委員

（3）学内他部署との連携

ｉ）プロジェクト 4（産学官連携＋SDGs 推進＋ダイバシティ推進）、学生団体 Petite Arche 主催イベントへの協力について

教職員協働のプロジェクトチームと、そのチームの活動に参加した学生たちが中心となって今年度立ち上がった学生団体 Petite Arche 主催で SDGs のゴール 12「つくる責任つかう責任」に焦点を合わせた企画が次の通り行われ、センターとして実施協力を行った。

①新聞紙ごみ箱づくりワークショップ

日時：2020 年 11 月 10 日（火）12:15～12:55　ハイブリッド開催

参加者：学生 16 名、教職員７名

②みつろうラップづくりワークショップ

日時：2021 年３月９日（火）13:00～14:00　ハイブリッド開催

参加者：学生６名、教職員４名、一般１名

（4）法人内での連携

ｉ）聖学院中学高等学校中 1 総合学習 L.L.T.「Learn Live Together」への協力について

聖学院中学高等学校の依頼を受けて、中学 1 年生３学期の総合学習 L.L.T において、日頃ボランティア活動に取り組む学生が活動を通して学んだことや感じたことなどを伝え、生徒のボランティア活動への興味関心を引き出す授業を行った。また協力にあたっては、授業に協力する学生の伝える力とファシリテーション力を高める研修会を事前に実施した。

①研修会

日　時：2021 年２月５日(金)14:00～16:30　Zoom 開催

参加者：学生６名、聖学院中学高等学校教員１名

内　容：・趣旨やねらいの共有と協力内容の確認
・ワーク①話す練習
・ワーク②生徒に投げかける質問を考える
・ワーク③質問を使って会話を進行してみる

②1 回目授業

日　時：2021 年２月 10 日（水）11:40～12:15　Zoom 開催

協力学生：ボランティア活動経験のある学生７名

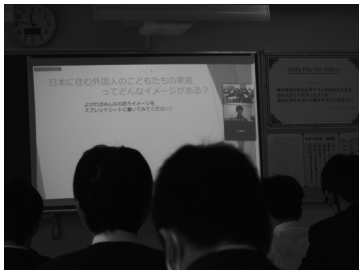
内　容：学生が各教室（5 クラス）に分かれて Zoom に入室し、授業がスタート。学生自らのボランティア活動の経験とまちとの関わりを語り、その後学生の進行で生徒とスプレッドシートを用いて意見交換を行った。

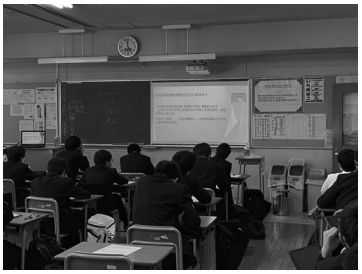
③2 回目授業

日　時：2021 年 2 月 17 日（水）11:40～12:15　Zoom 開催

協力学生：復興支援や防災活動経験のある学生 3 名

内　容：Zoom で各教室とつながり、東日本大震災で被災経験のある学生や自然災害地での復興支援活動に取り組む学生が体験談やそのときに考えたことやその後の行動について紹介。学生たちの話をもとに、①これからの災害（地震・台風等）に備えるためにどのようなことに取り組んだらよいか、②自分たちだけでなく、地域に住んでいる人みんなが助かるためにはどうしたらよいか、この 2 つをテーマに意見交換を行った。





（5）他大学との連携

ｉ）大学ボランティアセンターコーディネーター研究会

本研究会は、関東圏の大学ボランティアセンターの教職員の研修と情報交換を目的に 2013 年度に発足し、年 1～2 回のペースで開催している。今年度は、コロナ禍となり、ボランティア活動が制限されているなかで、どのような活動支援ができるか、密に情報交換の場が持たれた。

①大学ボランティアセンターコーディネーター研究会 2020 年度第一回学習会

日　時：2020 年 4 月 27 日（月）14:00～16:00　Zoom 開催

内　容：・現在の業務と今後の対応方針
・学生との関り方について
・新入生募集の方法について

参加校：神田外語大学ボランティアセンター／十文字学園女子大学ボランティアセンター
中央大学ボランティアセンター／東京都立大学ボランティアセンター
明星大学きらきらボランティアセンター／明治大学ボランティアセンター
立正大学ボランティア推進センター／聖学院大学ボランティア活動支援センター

オブザーバー参加：日本財団学生ボランティアセンター

②大学ボランティアセンターコーディネーター研究会 2020 年度第二回学習会

日　時：2020 年 6 月 19 日（金）14:00～16:00　Zoom 開催

内　容：・緊急事態宣言解除後の変化について
・緊急事態宣言下で取り組んできたこと

・対面ボランティア活動の再開に向けて
参加校：青山学院大学ボランティアセンター／神田外語大学ボランティアセンター
十文字学園女子大学ボランティアセンター
聖学院大学ボランティア活動支援センター／成蹊大学ボランティア支援センター
中央大学ボランティアセンター／帝京大学／東京都立大学ボランティアセンター
明星大学きらきらボランティアセンター／明治大学ボランティアセンター
立正大学ボランティア推進センター
オブザーバー参加：東京ボランティア・市民活動センター

③大学ボランティアセンターコーディネーター研究会 2020 年度第三回学習会
日　時：2021 年 3 月 15 日（月）14:00～16:00　Zoom 開催
内　容：・コロナ禍のボラセン 1 年間の報告
・次年度に向けて悩んでいること＆チャレンジしたいこと
参加校：青山学院大学ボランティアセンター／神田外語大学ボランティアセンター
十文字学園女子大学ボランティアセンター
聖学院大学ボランティア活動支援センター／中央大学ボランティアセンター
帝京大学／東京外国語大学ボランティア活動スペース（VOLAS）
東京都立大学ボランティアセンター／日本社会事業大学ボランティアセンター
明星大学きらきらボランティアセンター／明治大学ボランティアセンター
立正大学ボランティア推進センター

資料集

1. 聖学院大学ボランティア活動支援センター内規

聖学院大学ボランティア活動支援センター内規

（目的）
第1条　聖学院大学（以下「本学」という。）は、聖学院教育憲章内の「神を仰ぎ、人に仕う」、オンリーワン・フォー・アザーズ（他者のために生きる個人）、サーヴァント・リーダーシップなどの精神の具現化のため、キリスト教大学における教育活動の一環として推奨されるボランティア活動の普及に取り組み、本学における諸ボランティア活動を支援するために、聖学院大学ボランティア活動支援センター（以下「センター」という。）を設立する。

（組織）
第2条　センターの活動を円滑に展開するために、次の教職員を置く。
（1）センター所長　1名
（2）センター副所長　若干名
（3）ボランティアコーディネーター及びアドバイザー　若干名
（4）事務職員　若干名
（5）その他学長が大学教授会で指名した者
2　センターの運営は、第3項に規定する聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）によってなされ、センター所長が議長を務める。
3　運営委員会は以下の構成員から構成される。
（1）センター所長
（2）センター副所長
（3）チャプレン
（4）聖学院大学教授会代表（数名）
（5）聖学院大学学生代表（数名）
（6）大学事務局管理部長
（7）ボランティアコーディネーター
（8）アドバイザー
（9）センター職員
（10）聖学院大学学長、総局長は必要に応じ陪席できるものとする
（11）その他、センター所長が必要と認める者
4　第1項第1号に規定されるセンター所長は、学長が指名する。
5　第1項第2号に規定されるセンター副所長は、所長が若干名を指名する。

（事業）
第3条　センターは、第1条の目的を実現するために以下の事業を担当する。
（1）キリスト教に基づくボランティア精神の育成と普及に関する事業
（2）ボランティアの人材育成とその担保に関する事業
（3）学内の諸ボランティア活動の連絡、協力および支援に関する事業
（4）学外のボランティア情報の紹介とその活動の支援に関する事業
（5）ボランティア基金の育成と経済的支援に関する事業
（6）ボランティア活動の記録と広報に関する事業
（改廃手続）
第4条　この内規の改廃は、大学教授会の議を経て、学長が決定する。

附　則
この規程は、2013年4月1日から施行する。

附　則
この内規の一部改正（規程形式及び運営委員会の構成員の変更）は、2018年12月17日から施行する。

2. ボランティア活動支援センター運営委員一覧（2020 年度）

センター所長	若原幸範	学長補佐、政治経済学科准教授
センター副所長	渡邉正人	地域連携・教育センター所長、基礎総合教育部教授
運営委員	長嶋佐央里	政治経済学科准教授
	M. サベット	欧米文化学科教授
	清水 均	日本文化学科教授
	柴﨑 裕	児童学科特任教授
	佐久間隆介	児童学科特任講師
	五十嵐成見	人間福祉学部／心理福祉学部チャプレン、准教授
	金谷京子	こども心理学科／心理福祉学科特任教授
	西川　正	地域連携・教育センターアドバイザー
	伊藤みさき	学生サポートメンバー、こども心理学科４年
	玉之内 菖	学生サポートメンバー、心理福祉学科３年
	真野和英	経営企画部長
	菊池美紀	大学総務課マネージャー
	川田虎男	ボランティア活動支援センターアドバイザー
	芦澤弘子	ボランティアコーディネーター
	丸山阿子	ボランティアコーディネーター
	山田裕太	地域連携・ボランティア支援チーム

3. ボランティア活動支援センター運営委員会協議事項

第 87 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
新型コロナウイルス感染症のため中止

第 88 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2020 年４月 22 日（水）【持ち回り開催】
・夏の復興支援ボランティアスタディツアー実施の件

第 89 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2020 年６月３日（水）午後３時 20 分～4 時 20 分【オンライン開催】
・2020 年度ボランティア・まちづくり助成事業について
・夏の釜石“オンライン”スタディーツアーの実施について

第 90 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2020 年７月１日（水）午後３時 20 分～4 時 20 分【オンライン開催】
・被災地インターンシップの単位認定について

第 91 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2020 年９月９日（水）【持ち回り開催】
協議事項なし

第 92 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2020 年 10 月７日（水）午後３時 20 分～4 時 20 分【オンライン開催】
・復興支援ボランティアスタディツアー「サンタプロジェクト 10」の件

第 93 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2020 年 11 月４日（水）【持ち回り開催】
協議事項なし

第 94 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2020 年 12 月２日（水）午後３時 20 分～4 時 20 分【持ち回り開催】
・2021 年度ボランティア活動支援センター事業計画・予算の件
・東日本大震災 10 周年記念行事の実施検討の件

第 95 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2021 年１月６日（水）【持ち回り開催】
協議事項なし

第 96 回　聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会
日時　2021 年２月３日（水）【持ち回り開催】
協議事項なし

4. メディア出演・掲載

■毎日新聞@大学:2020 年 8 月 21 日
「大学倶楽部・聖学院大　学生のボランティアを応援する助成金審査会　オンラインで開催」
https://mainichi.jp/univ/articles/20200819/org/00m/100/006000c
（最終アクセス日 2022/2/1）

■日本経済新聞:2020 年 10 月 10 日(土)夕刊 1 面
「寄付や署名若者は動く」
2020 年 8 月に実施された保育園、子育て支援施設でのオンラインボランティア活動の様子が紹介された。

■テレビ埼玉「ニュース 545」:10 月 15 日(木)放送
センター主催で 10 月 9 日（金）に実施した「マイ・タイムラインを作ろう」の様子が紹介された。

■埼玉新聞:2020 年 12 月 8 日(火)10 面

「会えなくてもつながりを：上尾の聖学院大　保育園児とオンライン交流」
著作権により非表示

■テレビ埼玉「ニュース 545」:2020 年 12 月 18 日（金）放送
12 月 18 日(金)に行われた、認定 NPO 法人彩の子ネットワーク（上尾市）とボランティア・アソシエーション GRACE によるオンラインでのクリスマス交流会の様子が紹介された。

■上尾市社会福祉協議会:あげお社協便り165号(2021年2月1日号)p6-7

「コロナ禍におけるボランティア活動」

著作権により非表示

■読売新聞 Campus Scope:2021年2月5日(金)

「ボランティア活動街頭からエール【新型コロナ学生リポート】(29)」

https://kyoiku.yomiuri.co.jp/campus/contents/post-489.php (最終アクセス日 2022/2/1)

■埼玉新聞:2021 年 2 月 11 日(木)10 面

「ボランティアの未来探る：28日、オンラインサミット　東日本大震災10年県内大学生ら企画」
著作権により非表示

■リクルート進学総研:カレッジマネジメント Vol.227 Mar.-Apr. 2021 p16-17

「(3)地域貢献・ボランティア活動への対応：学生の学びと活動を止めない大学の取り組み　聖学院大学」
著作権により非表示

■毎日新聞埼玉版:2021 年 3 月 4 日(木)23 面

「教訓を未来へ　思い共有：学生ら企画「風化させない」
被災者と全国の160人　オンラインでつなぐ」

著作権により非表示

※2021 年 2 月 28 日(日)、3 月 1 日(月)に実施した「未来をひらく～私と 3.11 のこれまでとこれから～」についての報道一覧

■ラジオ

・NACK5「Good Luck! Morning!」:2021 年 2 月 16 日(火)

・J-WAVE「JAM THE WORLD"HEART TO HEART"」:2021 年 2 月 16 日(火)

・NHKFM さいたま「日刊さいたまーず"まちむら便り"」:2021 年 2 月 25 日(木)

・NHKFM さいたま「日刊さいたまーず"まちむら便り"」:2021 年 3 月 11 日(木)

■テレビ報道

・J:com「ジモト応援！埼玉つながる News」:2021 年 2 月 22 日(月)

・J:com「ジモト応援！埼玉つながる News」:2021 年 3 月 8 日(月)

・テレビ埼玉「情報番組マチコミ」:2021 年 3 月 8 日(月)

■毎日新聞埼玉版：2021年3月11日(木)25面

「被災地との関わり　風化させぬ：あの日の私未来の私　秋本一帆さん」
著作権により非表示

■産経新聞埼玉版：2021年3月11日(木)12面

「経験を生きる原動力に：聖学院大　学生ボランティアの歩み」
著作権により非表示

■読売新聞埼玉版：2021 年 3 月 12 日(金)

「形変え受け継ぐ復興支援：聖学院大　ボランティアら思い語る」

著作権により非表示

5. 広報ポスター各種

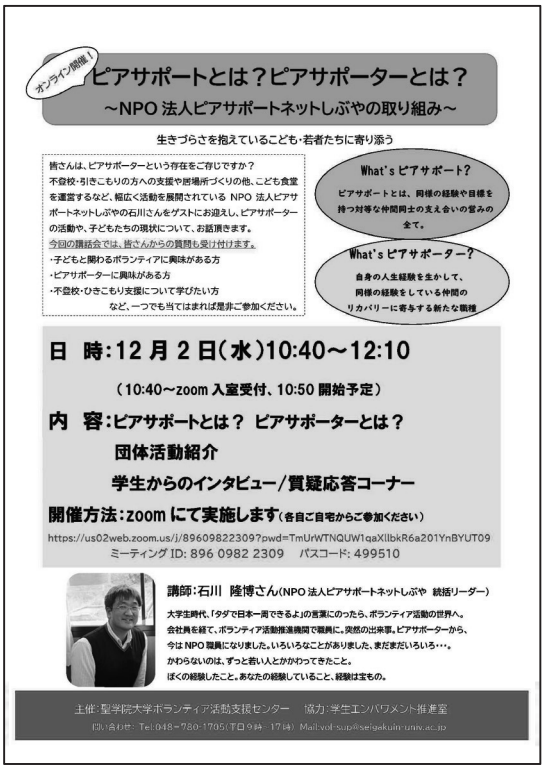
■オンライン会議を体験してみよう！

■オンラインボランティアサポーター養成講座

■学生サポートメンバー養成講座

■「コロナウイルスと私たち」

■ピアサポートとは？ピアサポーターとは？



■ちくちくボランティア

■新歓ボラ Tea@オンライン

■新歓ボラ Tea@Remo

■新歓ボラ Tea@オンライン

■ボランティア・まちづくり活動助成事業
応募団体募集（チラシ表面）

■ボランティア・まちづくり活動助成事業
応募団体募集（ゼミ向け・チラシ表面）

■ボランティア・まちづくり活動助成事業
応募団体募集（チラシ裏面）

2020年度聖学院大学ボランティア・まちづくり助成金　募集要項

応募資格	地域へ貢献する意識をもった聖学院大学の学生5名以上の有志のグループ。 以下のみなさんは誰でも応募できます。 ① 学内外のボランティア団体 ② ゼミ・アドバイザーグループ ③ 学友会クラブ・同好会 ④ 各種委員会 ⑤ 有志の集まり ※オンライン上でのボランティア活動等、新しいアイディアを待っています。
助成内容 ※総額 30万円	① 地域貢献活動助成　最大 5万円 ② 被災地応援・復興支援助成　最大 5万円
助成対象経費	活動を行う上で必要な経費全般。ただし、自分たちの飲食代は除く。
応募期間	2020年7月1日（水）～15日（水）
助成対象期間	2020年5月1日～2021年3月末までの活動に対して助成
申請書・応募方法	① Teamsで開催するオンライン説明会兼研修会にご参加ください。 Teams参加コードはUNIPAを確認するか、ボランティア活動支援センターまでメール vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp でご確認ください。 6月29日（月）18:00～19:00 ／ 6月30日（火）18:00～19:00 どちらかにご参加ください。申請の流れについて説明し、事業企画書の書き方について研修を行います。 ② 必要事項を記入し申請書を7月15日（水）までに、ボランティア活動支援センターにメールで提出ください。 ③ 7月18日（土）午後にTeamsで審査員とのオンライン面談を行います。時間については①の説明会の際に調整を行います。
選考方法 助成決定	申請書類とオンライン面談の内容をもって助成額を決定します。 決定連絡は7月末を予定しています。 また、助成金の交付は秋学期（10月末までに実施）となります。
報告書の提出と報告会への参加について	報告書は活動終了後1ヶ月以内の提出になります。（ただし、3月の活動は3月末日）また、2021年1月8日（金）に実施予定の活動報告会にて助成対象事業の報告（現在のところ学内にて開催予定）をしてもらいます。
申込み・問合せ先	聖学院大学ボランティア活動支援センター（1号館1階　1103室） 担当：川田・戸澤 TEL：048-780-1705（平日9:00～17:00） Mail：vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp
その他	今年度の特別対応として、予定していた活動がコロナウイルス感染拡大等の事由で中止になるなど、活動内容に変更があった場合、助成金の返金を受け付けます。
共催団体	聖学院大学同窓会 聖学院大学ボランティア活動支援センター、地域連携・教育センター

聖学院大学同窓会会長　秋谷大輔（2004年度　欧米文化学科卒業生）
地域や社会貢献、ボランティアを通じ新たな学び・成長を遂げる皆さんをサポートするべく、私たち同窓会からできる限りのお手伝いをさせて頂きます。既成概念にとらわれず様々なアイディアで出来ること・したい事を具体化・実行する皆さんの活躍を願っております。

学校法人聖学院は、国連グローバルコンパクトに署名・加入し、ＳＤＧｓを目指した活動を推進しています。

■復興支援“オンライン”スタディツアー（チラシ表面・裏面）

聖学院大学 復興支援

“ オンライン” スタディツアー

参加者募集中！！

2020 年 7 月 31 日更新：新型コロナウイルス感染症対策として
ツアーの内容、開催時間を変更して実施します。

聖学院大学は東日本大震災で甚大な被害のあった岩手県釜石市で、継続的に復興支援活動を行っています。
今年の夏は “オンライン” を通じて、釜石の方々と交流の時を持ちます。

自分たちにできることは何だろう。
オンライン交流を通じて考えよう。

■日程：**8月29日（土）午前10時～午後15時半**（昼休憩 12 時～13 時半）
30日（日）午後13時半～午後15時半

■対象：ビデオ通話※が可能な全学生 最大50名
※当ツアーは ZOOM で行います。アプリのダウンロードや参加方法については申込みの際にお知らせします。
また、交流企画や振り返りではビデオ、マイクともにオンで参加いただきます。

■締切：8月7日（金） ※定員に達し次第締め切りとなります。

■ツアー内容：震災学習と復興支援ボランティアチーム SAVE の学生による釜石見どころ紹介、宝来館岩崎女将のお話、高橋牧師のお話と礼拝、参加者間での振り返り、など（予定） ツアーの詳細は裏面をご覧ください。

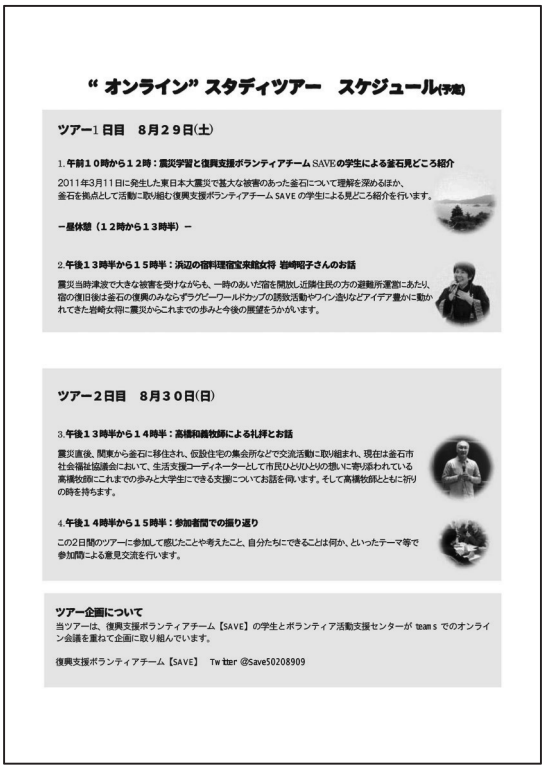
■参 加 費：無料

■申込方法：参加を希望する方は、ボランティア活動支援センターまでメールで連絡ください。メールを送る際は、タイトルを「オンラインツアー参加希望」として、①氏名、②学籍番号を明記してください。

■その他：新型コロナウイルス感染症拡大状況によっては中止となることもあります。あらかじめご了承ください。

★オンラインスタディツアーについて知りたいことがあれば、ボランティア活動支援センターまでご連絡ください！★
メール：vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp TEL048-780-1705（平日午前 9 時～午後 17 時）

主催：聖学院大学ボランティア活動支援センター 共催：復興支援ボランティアチーム【SAVE】



“ オンライン” スタディツアー スケジュール（予定）

ツアー1 日目 8月29日（土）

1. **午前１０時から１２時：震災学習と復興支援ボランティアチーム SAVE の学生による釜石見どころ紹介**
2011年3月11日に発生した東日本大震災で甚大な被害のあった釜石について理解を深めるほか、釜石を拠点として活動に取り組む復興支援ボランティアチーム SAVE の学生による見どころ紹介を行います。

－昼休憩（１２時から１３時半）－

2. **午後１３時半から１５時半：浜辺の宿料理宿宝来館女将 岩崎昭子さんのお話**
震災当時津波で大きな被害を受けながらも、一時のあいだ宿を開放し近隣住民の方の避難所運営にあたり、宿の復旧後は釜石の復興のみならずラグビーワールドカップの誘致活動やワイン造りなどアイデア豊かに動かれてきた岩崎女将に震災からこれまでの歩みと今後の展望をうかがいます。

ツアー2日目 8月30日（日）

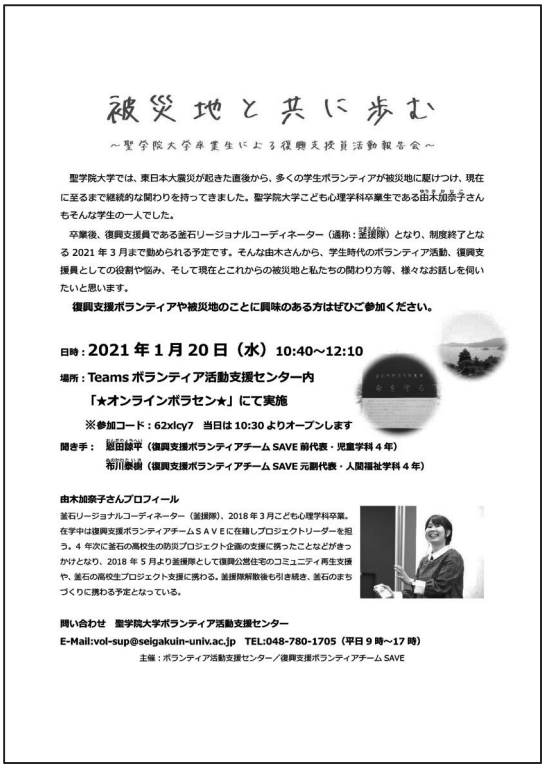
3. **午後１３時半から１４時半：高橋和義牧師による礼拝とお話**
震災直後、関東から釜石に移住され、仮設住宅の集会所などで交流活動に取り組まれ、現在は釜石市社会福祉協議会において、生活支援コーディネーターとして市民ひとりひとりの想いに寄り添われている高橋牧師にこれまでの歩みと大学生にできる支援についてお話を伺います。そして高橋牧師とともに祈りの時を持ちます。

4. **午後１４時半から１５時半：参加者間での振り返り**
この2日間のツアーに参加して感じたことや考えたこと、自分たちにできることは何か、といったテーマ等で参加間による意見交流を行います。

ツアー企画について
当ツアーは、復興支援ボランティアチーム【SAVE】の学生とボランティア活動支援センターが teams でのオンライン会議を重ねて企画に取り組んでいます。

復興支援ボランティアチーム【SAVE】 Twitter @Save50208909

■被災地と共に歩む



被災地と共に歩む

～聖学院大学卒業生による復興支援員活動報告会～

聖学院大学では、東日本大震災が起きた直後から、多くの学生ボランティアが被災地に駆けつけ、現在に至るまで継続的な関わりを持ってきました。聖学院大学こども心理学科卒業生である由木加奈子さんもそんな学生の一人でした。

卒業後、復興支援員である釜石リージョナルコーディネーター（通称：釜援隊）となり、制度終了となる 2021 年 3 月まで勤められる予定です。そんな由木さんから、学生時代のボランティア活動、復興支援員としての役割や悩み、そして現在とこれからの被災地と私たちの関わり方等、様々なお話しを伺いたいと思います。

復興支援ボランティアや被災地のことに興味のある方はぜひご参加ください。

日時：2021 年 1 月 20 日（水）10:40～12:10

場所：Teams ボランティア活動支援センター内
「★オンラインボラセン★」にて実施
※参加コード：62xlcy7 当日は 10:30 よりオープンします

聞き手：
廣田陸平（復興支援ボランティアチーム SAVE 前代表・児童学科 4 年）
谷川愛歩（復興支援ボランティアチーム SAVE 元副代表・人間福祉学科 4 年）

由木加奈子さんプロフィール
釜石リージョナルコーディネーター（釜援隊）、2018 年 3 月こども心理学科卒業。在学中は復興支援ボランティアチームＳＡＶＥに在籍しプロジェクトリーダーを担う。4 年次に釜石の高校生の防災プロジェクト企画の支援に携ったことなどがきっかけとなり、2018 年 5 月より釜援隊として復興公営住宅のコミュニティ再生支援や、釜石の高校生プロジェクト支援に携わる。釜援隊解散後も引き続き、釜石のまちづくりに携わる予定となっている。

問い合わせ 聖学院大学ボランティア活動支援センター
E-Mail:vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp TEL:048-780-1705（平日 9 時～17 時）
主催：ボランティア活動支援センター／復興支援ボランティアチーム SAVE

■聖学院大学と被災地の歩み（チラシ表面）

聖学院大学 震災復興シンポジウム

聖学院大学と
被災地の歩み

東日本大震災から10年を覚えて

2011年3月11日に起きた東日本大震災から間もなく10年の月日が流れようとしています。聖学院大学は、震災直後から学生、教職員が力を合わせ、被災された地域の復旧と関わりを持たせていただいてきました。今改めて、被災された方の10年の歩みを振り返るとともに、これからについてみなさまと一緒に考える機会として、本シンポジウムを開催させていただきます。

2021年
3/7（日） オンライン開催（Zoom） 13:30～16:30

対象者
一般、在学生、教職員、卒業生、その他関係者

主催
聖学院大学
聖学院大学ボランティア活動支援センター／地域連携・教育センター

申込はこちら
【申込期間】 2月8日（月）～3月3日（水）正午
下記HPよりお申し込みください。
https://www.seigakuin.jp/events/210307shinsaifukkou
QRコードからアクセスできます

Love God and Serve His People
聖学院大学

お問い合わせ 入試・広報課
TEL 048-780-1707 月～金（9:00～17:00）
pr@seigakuin-univ.ac.jp https://www.seigakuin.jp
〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 FAX 048-725-6891

■聖学院大学と被災地の歩み（チラシ裏面）

聖学院大学と被災地の歩み

～ 東日本大震災から10年を覚えて ～

プログラム　［司会］**川田 虎男**（ボランティア活動支援センター）

13:30～	開会挨拶	**清水 正之**（聖学院大学 学長・理事長）
13:40～	シンポジウムⅠ「聖学院大学と被災地との歩み」	［進行］**平 修久**（聖学院大学 副学長）
14:55～	釜石からのメッセージ	**市川 淨子氏**（釜石市鵜住居地区主任児童委員）
15:05～	休憩	
15:15～	シンポジウムⅡ「今、そしてこれから」	［進行］**菅原 幸裕**（ボランティア活動支援センター所長）
16:30～	閉会挨拶	**渡辺 正人**（地域連携・教育センター所長）

シンポジウムⅠ　**「聖学院大学と被災地との歩み」** 13:40～

蛭間 龍矢　（コミュニティ政策学科2011年度卒）

東日本大震災発災直後、宮城県石巻市で泥かき作業に従事するとともに、高校時代から取り組んでいるライフセーバーの資格を活かし、2ヶ月にわたって岩手県山田町での行方不明者捜索活動等に参加した。現在は株式会社行政代表取締役として野外教育事業を展開している。

山口 雄大　（人間福祉学科2013年度卒）

復興支援ボランティアチームSAVE初代共同代表。釜石の復興の象徴である桜を届ける「桜プロジェクト」の発起人。復興支援活動を通して、地域の支えあいの重要性を実感し、現在荒川区社会福祉協議会に勤務。卒業後も現在に至るまで後輩たちの活動を見守り続けている。

菅野 雄大　（こども心理学科2018年度卒）

震災当時中学生で、宮城県仙台市において実家が被災。避難所生活を送る。全国から駆け付けたボランティアとの交流を通して、自身も復興支援のボランティアとして活動し、聖学院大学において復興支援団体STEP. を立ち上げる。現在会社勤めをしながら語り部活動を継続している。

シンポジウムⅡ　**「今、そしてこれから」** 15:15～

玉之内 嵩　（心理福祉学科3年 復興支援ボランティアチームSAVE現代表）

1年生の春よりSAVEに所属し、現在代表を務めている。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大により活動拠点である岩手県釜石市での活動がかなわなかったが、「震災を風化させない」を合言葉に昨年夏オンラインスタディツアーを実施した。

山下 佑太　（心理福祉学科3年 復興支援ボランティアチームSAVE）

1年生の夏に参加した、復興支援ボランティアスタディツアー「よいさっ！プロジェクト」がきっかけとなりSAVEに所属。活動を通して震災の出来事を次世代に伝える大切さに気づき、昨年度には防災講座を企画し、母校である聖学院小学校や、中学校の授業の一環で講座を実施。

■未来をひらく

聖学院大学　ボランティア活動支援センター
2020 年度事業報告書
2022 年 2 月発行

発行
聖学院大学ボランティア活動支援センター
〒362-8585　埼玉県上尾市戸崎1-1
TEL: 048-780-1705
FAX: 048-781-0094
URL: https://www.seigakuin.jp/life/seig-volunteer/
E-mail: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp

学校法人聖学院は 2018 年 4 月、
グローバル・コンパクトに署名・加入し、
SDGs を目指した活動を行っています。